文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム

プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育 ～課題探求能力を育成するPBL教育の方法論的整備～

第3弾 学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦！

誰が何を いかに評価 するのか?

シンポジウム・レポート

2012年2月18日(土)

今出川キャンパス 明徳館1番教室

同志社大学 PBL推進支援センター

次　第

■挨拶

13:00　土田 道夫　同志社大学副学長 教育支援機構長 法学部教授

13:10　山田 和人　同志社大学PBL推進支援センター長 文学部教授

13:20

■基調講演

「評価とは何かの基本に戻ってPBLの評価を考える」

溝上 慎一 京都大学高等教育研究開発推進センター准教授

1970 年福岡県生まれ。神戸大学教育学部卒業、1996 年京都大学高等教育教授システム開発センター・助手を経て、2003 年より京都大学高等教育研究開発推進センター准教授。京都大学博士（教育学）。専攻は青年心理学、自己形成論、大学生の学びと成長。著書に『現代青年期の心理学－適応から自己形成の時代へ－』（2010 有斐閣選書）、『大学生の学び・入門－大学での勉強は役に立つ！ －』（2006 有斐閣アルマ）など。

■発表

14:00　**発表1**　**2011 年度プロジェクト科目**

『心ぬくもる「絵本」に出会う～絵本ソムリエ・プロジェクト～』

【プロジェクト概要】

「絵本は心のごちそう」をテーマに、まだ出会っていない感情に出会える「絵本」を通した、教養の場（イベント）のプロデュースを目的に活動しました。

川崎 裕未 同志社大学社会学部社会福祉学科3年

「このプロジェクトを通じて知らなかった絵本の魅力をたくさん知ることができ、絵本がもっと好きになりました。貴重な経験をたくさんできたので良い学びになったと思います。」

金丸 誠克 同志社大学経済学部経済学科3年

「私は、2 回生の終わりに大学に入学したからには何か成果を残していきたいと思い、3 回生の 1 年間は主体的に動いていくことを目標としました。それを具体化させる行動の 1 つとして、プロジェクトを始めました。」

14:15　**発表2**　**2011 年度プロジェクト科目**

「京都の織物文化活性化計画！～織物の伝統技術について考えよう～」

【プロジェクト概要】

京都の伝統織物である「錦」をつくる西陣の職人さんを訪ね、見学取材を重ねる中で錦織物の深い魅力に触れる一方、「後継者問題」「伝統技術継承の危機」など錦織物が抱える厳しい現実を前にし、「まず一人でも多くの人に知ってもらうことが『活性化』に向けての第一歩ではないか」の原点に戻って活動しました。

田中 菜月 同志社大学文学部英文学科3年

サブリーダー

「プロジェクトを通して“活性化とは何か”“日本とはどういう国か”という根本的なことを考えるとともに、“自分はどういう人間であるのか”改めて見直すことが出来ました。錦と、錦を通して出会った多くの方々とのご縁に、とても感謝しています。」

西川 久美子 同志社大学社会学部教育文化学科3年

「錦織物について何も知らない状態からのスタートでしたが、何度も工房を訪れる中で錦織物や洗練された技術の美しさを肌で感じ、学んできました。ここでの経験をもとに今後も学び続けていきたいと思っています。」

平城 奈津子 同志社大学政策学部政策学科2年

学生成果報告書担当

「プロジェクト科目では、多くのことを学びました。自分たちにできることの限界や、他のこととの時間の調整など、チーム内でうまくいかないことも多々ありましたが、この 1 年間は本当に濃密で成長できた 1 年間となりました。」

14:30　休憩（15分）

■報告

14:45　「東京電機大学情報環境学部におけるPBL型授業の評価について」

土肥　紳一　東京電機大学情報環境学部准教授
東京電機大学工学研究科修士、東京電機大学工学部第一部電子計算機センターを経て、2007 年より東京電機大学情報環境学部情報環境学科准教授。『「工学」のおもしろさを学ぶ』（共著・東京電機大学編、2010 東京電機大学出版）など。2002 年度より情報環境学部におけるPBL型授業の開設・運営に携わる。

15:00　「専修大学ネットワーク情報学部におけるPBL型授業の評価について」

飯田 周作　専修大学ネットワーク情報学部教授
北陸先端科学技術大学院大学博士後期課程修了。博士(情報科学)。研究分野は情報学基礎およびソフトウェア工学。形式手法の応用に興味を持つ。専修大学ネットワーク情報学部３年次必修「プロジェクト科目」プロジェクト実施委員会委員長。

■パネルディスカッション

15:15　「誰が何をいかに評価するのか？」

溝上　慎一　京都大学高等教育研究開発推進センター准教授
土肥　紳一　東京電機大学情報環境学部准教授
飯田　周作　専修大学ネットワーク情報学部教授
川崎　裕未　同志社大学社会学部社会福祉学科３年
金丸　誠克　同志社大学経済学部経済学科３年
西川　久美子　同志社大学社会学部教育文化学科３年
田中　菜月　同志社大学文学部英文学科３年
山田　和人　同志社大学文学部教授・PBL 推進支援センター長
文学部教授（国文学科）。専門は日本近世文学。江戸時代前後の文学や芸能、国内外の人形芝居の調査・研究。日本近世文学会委員、日本文学協会委員、芸能史研究会評議委員。同志社大学プロジェクト科目検討部会長、2009 年より同志社大学 PBL 推進支援センター長。

16:40　終了

＜司会＞
牧　知香良　同志社大学 政策学部 政策学科 3年
2011 年度プロジェクト科目
『「花のキャンパスライフ」から情報発信に挑戦、新聞、ラジオ、ネットで』学生リーダー
「私がこの科目を受講した理由は、実践型の授業を通して問題発見、解決能力を身につけたいと考えたからです。１年間の活動を振り返ると、スケジュール管理、チームマネジメントなど多くの課題にも直面しました。しかし、チームで活動して得たスキルは本当にかけがえのないものになりました。」

17:30～19:00　■懇親会
会場 ： 同志社大学 寒梅館 6階 大会議室　※事前申込制

第３弾 学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦！
ー誰が何をいかに評価するのか？ー

2012 年 2 月 18 日（土）13:00～16:40
同志社大学今出川キャンパス明徳館 1 番教室

司会
ただいまより、文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】、大学教育推進プログラム、「プロジェクト・リテラシーと新しい教養教育～課題探求能力を育成する PBL 教育の方法論的整備～」の取組みとして、同志社大学PBL推進支援センター主催2011年度シンポジウム、『第3弾 学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦！-誰が何をいかに評価するのか？-』を開催いたします。開催に先立ちまして、同志社大学副学長・教育支援機構長・法学部教授 土田道夫先生よりご挨拶をお願いします。

■挨拶

同志社大学副学長・教育支援機構長・法学部教授 土田 道夫

副学長の土田でございます。本日はお忙しい中、多くの方々にご来場いただきましてありがとうございます。本日、基調講演をしていただきます溝上慎一先生をはじめといたしまして、ご登壇いただく先生方に、ご多忙にもかかわりませずお越しいただきましたこと、厚くお礼申し上げます。このシンポジウムは文部科学省の大学教育学生支援推進事業プロジェクトとして、一昨年6月と昨年2月、2回シンポジウムを開いております。それに引き続いて第3弾として開催するものであります。

この取り組みの推進になっておりますのが同志社大学のプロジェクト科目というものであります。全学共通教養教育科目の一環として、2006年度に開設しております。この科目は、通常の科目と異なるところが2点ございます。一つは、PBL（Project-Based Learning）を取り入れたことです。受講する学生は学部も学年も異なるもので構成されておりまして、教養科目のメリットを最大限生かし

たものであります。もう一つの特色として、広く社会にテーマを公募しているということです。社会の教育力を大学へということで、プロジェクトのテーマを社会、地域から募集して、またそのプロジェクトをご提案いただいた方に嘱託講師として授業科目を担当していただいています。大学の専任教員とともに担当していただく方針をとっております。この科目は2006年の「現代GP」に採択されました。教育方法のユニークさもあって、同志社大学の中でPBL教育が定着いたしまして学部の専門科目の方でも初年次教育、演習等で、次第に導入されるようになっております。そういう影響力の大きいところがございます。また地域の教育力を大学に還元するという一方的なものではなく、双方向的なもので、この点でも学内外で評価されておりまして、同志社教育の一つPRポイントとなっております。成果報告会の学生を見ておりますと、通常の授業とは別の意味で、活き活きとした学生の取り組み姿勢を痛感し、学生の成長を感じることが多くございます。

こうして出発したPBLですが、現在ではプロジェクト科目で養われる学生の力をプロジェクト・リテラシーという概念でとらえまして、培われる能力の向上、プロジェクト全体の運営、モラル、態度も身につけて成長していただくことを目標に現在、進めているところでございます。

本年度のシンポジウムは、「学びの原点　プロジェクト科目の挑戦！―誰が何をいかに評価するのか？―」というテーマで評価についての議論を深めていただきたいと思います。本日は、高等教育、青年心理学の気鋭の研究者として研究を進めておられます、アクティブラーニングの可能性についても調査、研究をしておられる京都大学の溝上慎一先生から「評価とは何かの基本に戻ってPBLの評価を考える」というタイトルでご講演をいただきます。その後、本年度の2つのクラスのプロジェクト科目について学生から発表させていただきます。本学以外でもプロジェクト科目を導入されている大学から正課科目としてPBLを採り入れておられる東京電機大学から土肥紳一先生、専修大学の飯田周作先生にお越しいただいてお話をいただく予定です。さらに、各登壇者からの講演、発表、報告を受けて、その後、各先生方と科目受講生との間で「誰が何をいかに評価するのか？」についてパネルディスカッションを予定しております。お越しの皆様からもご意見、ご見識を頂戴してご一緒に議論を深めることかできればと考えています。ぜひ積極的なご参加をお願いできれば幸いでございます。以上をもちまして私の挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

司会
続きまして同志社大学PBL推進支援センター長、プロジェクト科目検討部会長、文学部教授・山田和人先生にお願いします。

■挨拶

同志社大学 PBL 推進支援センター長・文学部教授　山田　和人

このようにたくさんの皆様方に来ていただきましてありがとうございます。プロジェクト科目検討部会長を務めるともにPBL推進支援センター長を務めさせていただいております。今回のテーマは「誰が何をいかに評価するのか？」です。実践型、参加型のプログラムをどのように評価するのかについては頭を悩ます部分でもあり、従来型の評価ではとらえがたい多岐にわたる側面をどのように考えていけばいいのかを、一度、真正面から議論してみたいということから、このようなテーマ設定をさせていただきました。今回は溝上先生の問題提起を受け、学生の発表、先進的にPBLに取り組んでおられる大学の実践例を踏まえて、全体として議論ができればいいなと考えております。

「誰が何をいかに？」という問いかけに対して、評価される学生、評価する側の教員の両者が同じシンポジウムの席上に立つことで、互いの考えが浮かび上がってくれば大変有意義なパネルディスカッションになるのではないかと、大いに期待して、このような形をとらせていただきました。

PBLのプロジェクト科目を履修していた卒業生が訪ねてきてきた時、こういうことをいわれました。「いやあ、この科目のおかげで打たれ強くなりました」。打たれ強くなったというのは、どんなものかと思うんですが、結構、いいところを指摘しているのではないかと。社会に出て上司にアドバイスを受けたりしながらだんだんと仕事を覚えていく。しかし、指摘された内容をそのまま受け取って自分の評価につなげてしまうと、ぺちゃんこになって立ち上がることができなくなってしまう。しかしながら「ひょっとしたらこういう見方もあるのではないか、こういう視点もあるのではないか」と、考えることができるとすれば、すなわちもう一つ別の尺度をあてはめてみることができるならば、もう少し余裕を持って指摘された内容を受け止めることができるようになるのではないか。一言でいいますと、「自己評価力」が身につく。一つのものごとに取り組んで知的探究心に基づいた多面的な評価を、その人はできるようになるのではないか。その評価力があれば、将来、自分自身、いろんな場面に遭遇した時、対応できるようにもなるのではないかと思います。

そういう意味での学生の評価力もまた、私たちにとってみれば大きなファクターになるのではない

かと考えております。その意味で評価といいましても、決して、一面的ではない、多面的ものであると思われますので、いろんな側面を学生の取り組みの中でごらんいただきながら、それぞれの立脚点を踏まえた上で、相互に活発な議論が行われ、今後のPBLの評価について、学生自身の評価能力について、さまざまな角度から議論を深めていくことができれば、と思っております。どうぞこの場が、より大きな学びの場になることを期待して、ご挨拶とさせていただきたいと思います。

司会

それでは「評価とは何かの原点に戻ってPBLの評価を考える」のテーマで京都大学の溝上慎一先生よりご講演をいただきます。続いて、2011年度、プロジェクト科目履修生による発表。東京電機大学の土肥先生、専修大学の飯田先生より、各校での取り組みについてご報告いただいた後、パネルディスカッション「誰か何をいかに評価するのか？」について、各先生方に同志社大学の学生も含めたこのシンポジウムのテーマに沿って議論をしていただきます。私は本日の司会を務めさせていただきます同志社大学政策学部政策学科3年の牧知香良です。どうぞ、よろしくお願いします。

それでは最初のプログラムです。まず最初は、『現代大学生論』『大学生の学び』『心理学者、大学教育への挑戦』など、ご専門の青年心理学、自己形成論の立場から大学教育への数々のご著書もある、京都大学高等教育研究開発推進センター准教授・溝上慎一先生から「評価とは何かの基本に戻ってＰＢＬの評価を考える」のテーマでご提言をいただきます。溝上先生よろしくお願いいたします。

■基調講演　「評価とは何かの基本に戻ってＰＢＬの評価を考える」

京都大学高等教育研究開発推進センター准教授　溝上慎一

溝上です。よろしくお願いいたします。最初に、これだけ大きな組織でPBLを実践されている大学は、全国でもそうないと思いますので、その成果を出されている同志社大学に敬意を表したいと思います。本日、「教育とは何かの基本に戻って･･･」というテーマでお話するつもりでしたが、講演時間が短くゆっくり教育の基本を話している時間がないようですので、水準を一つ落として「評価とは何かの基本に戻って･･･」にタイトルを変更しました。今日の話は評価です。よろしくお願いします。

取り組みが進んでくると必ず最後は評価の話になるわけでして、私はアクティブラーニングを上位概念として、このテーマに取り組んでいますが――つまり、私の中では Project-Based Learning、Problem-Based Learning を含めてアクティブラーニングを上位概念としております――、そのアクティブラーニングの取り組みで評価の話になると、雰囲気が急に渋くなります。終わってから「よかっ

た」という雰囲気になかなかなりません。本日もそうなるような気がしていますが、いずれにしても、最後のパネルディスカッションのところで実践報告を伺った後のかみ合わせをしたいと思っています。「打たれ強くなった」という学生の成果があると山田先生は先ほどおっしゃいました。プロジェクトにしっかり参加して取り組んだ学生が、そういう状況になるのはほんとうにうれしいことですし、プロジェクトを通して成長した姿をみるのは喜びでもあります。ところが教育で評価を考えていく時、打たれ強くなることを目標として掲げていたのか、ということを確認しなければなりません。目標として掲げていれば、プロジェクトのさまざまな授業科目の中に、どこに学生を打たれ強くしていくポイントを入れていたのか、プロジェクト科目の中にも授業デザインがあるわけですか、どこに学生をしっかり打たれ強くしていくポイントを入れていたのか。入れていれば学生がそれにどう取り組み、どう打たれ強くなったとアセスメントしていくのか。授業デザインのところで、ちゃんと目標に掲げていたかを強く問うていかないと、評価にはならないということを申し上げなければなりません。なぜそういう話をしなければならないか。目標や授業デザインを問うていかないと、打たれ強くなった学生が出てくることもありますが、そうでないこと、そちらの方が多いと思いますが、そういうことが出てくるからです。そして、アセスメントしていくとき、指標が必要になりますから、そのときにどういう意味で打たれ強くなったかたを考えなければならなくなるからです。このような一連のプロセスを見ていくことが評価です。打たれ強くなった学生はとてもいいのですが、それは偶然の産物なのかもしれません。必然にできるだけ近づけていくところに、教育の醍醐味があるのだと思います。評価はここに絡みます。

今日はプロジェクトの内容にあわせて、4つの問いを立て、評価はこのように考えていくのではないかというお話をしたいと思います。プロジェクト科目での取り組みは、アクティブラーニングの授業でも同じなのですが、内容が深く問われなければなりません。内容が問われないのはアクティブラーニングの悪いところでありまして、取り組みや成果報告をみていると、学生が一生懸命参加して仕上げて発表して「最近の学生はよく頑張っているよね、捨てたものじゃないよね」とだけで終わることが多くあります。もちろん、そこに至るまでの授業者、プロジェクトコーディネーターの並々ならぬご苦労はわかっているつもりですので、それは前提です。中身にこだわって、学生がどこまで学ぶべきなのかをしっかり考える。目一杯格闘させて最後に何かしらの成果を出させる。授業者は取り組むテーマにあわせて、知識や内容を掘り下げていくための視点を持っているか。アクティブラーニングの授業では、このような視点を持っていないことが非常に多い。知識というものが取り組みの質を深めていきます。これはPBLに限りませんが、申し上げておきたいと思います。

Wiggins. G. McTighe. J.という人が Backward Design Process を提唱していますが、評価というのは、取り組みをやって最後に学生が何かしらのところにたどりつきました、というものではありません。学生をこういうところに到達させたいという目標、理想の姿を最初にイメージして、それに向けて始めに戻って授業をデザインしていく。これが Backward Design Process ですし、そのプロセスの中にさまざまなレベルの評価の観点を組み入れていきます。

今日は教科書的な話を短い時間でお話をしますが、私の見ている限り、評価論はそんなに新しいものが次々と出てきているという印象はありません。評価論は、この10年、15年、繰り返し同じ話が違った言葉で出てきて議論されています。その意味ではここで初めてお聞きになる方は、こういう観点が一般的に提起されているとご理解ください。北米は日本より進んでいると思いますが、日本と同じく評価にたどり着く実践が、そう多いわけではありません。アクティブラーニングでも、今日、お話するような評価を踏まえてデザインされ、取り組まれているものは、そんなにたくさんないと思

います。日本よりはずいぶん進んでいると思いますが、当たり前のようになっているわけではないと思います。

評価の問い1。「PBLプロジェクトの目標をどのくらい達成しているか」

まず、目標を立ててないとアセスメント（評価）はできませんので、同志社大学のPBLは何を目標に掲げているのかを先に見ておきます。こう書かれています。現場で学び、本物に触れることを通して、自ら取り組むべき課題を発見し、その解決のため粘り強く考え抜く力を持った学生の育成・・・。内容的には、すばらしいことです。そして、プロジェクト・リテラシー（コミュニケーション力、自己認識力、マネジメントリテラシー力、行動力など）を育てていきたい。学生の中に潜在する研究力（知りたい、学びたい）、教育力（教えたい、伝えたい）、社会力（役に立ちたい、つながりたい）を呼び覚まし、自律的・自発的学びを獲得していくこと。こういうのが掲げられています。それらをしっかり評価の枠組みに入れているということであれば、PBLプロジェクトの完成度は、かなり高くなっているとなるわけです。

では、評価をどうやっていくか。学生の成果報告、作品を仕上げていく、卒業記念作品とか、学生の学習成果、4年間の成果が評価される。それが一つの大きな評価指標です。ただ力というのを育ていきたいと思った時には、途中のアセスメントが必要になります。評価論の中では繰り返し出てきている話ですが、このプロセス評価をしていかないと教育や学習の質は高まりません。それを組織的に取り組むとなるともっと大変なことで、一般の先生、プロジェクト科目担当の方々がどのようにおこなうか、まじめに考えるとほんとう大変なことです。しかし、これを面倒臭いとか、しんどいと思うと進みませんので、「評価とはこういうものだ」と当たり前になるくらいにいずれはしないといけません。

ルーブリックは、プロセス評価をしていくときの典型的なイメージをつくります。たとえば、レポートを書かせます。従来なら先生がパッと読んで「いいじゃないか」とABCとかでつける。しかし問題は、どういう観点でレポートを読んで、いい、悪い、80点、70点とつけているのか。従来の多くの先生方は、その点を明示化していなかったと思います。ある学生は80点、何々君は75点で、その差を説明しないといけない時代になってきた、という話ではなく、評価の観点を自覚しないと、学生のある力をしっかりと育てていくことはできないということです。レポートでリサーチの観点があって、A～Dまでの段階をつけるとしたら、何段階なのか。論理、構成、分析、回答／議論とか、ある先生がレポートをどういう観点で評価をするのか。複数の次元で評価していく、

最終的にはリサーチの観点でB、論点ではA、分析問題はA、技能はCとかつけていく中で、最終的にBとかになる。こういうのをつけていると、このレポートを通して学生にどういう力を付けさせたいのかがはっきりしてきます。次のセメスター、年度の授業で今度レポートを書かせる時にもう少しこういうふうに書くように指導を入れようとか。授業とか科目のデザインが精緻になってきます。そんなふうにして評価の観点をしっかり立てていきます。

PBLの評価の観点を、私なりに並べてみると、こういう感じになるかなと思います。いろんな作業を一つひとつとの中でつくってもいいし、プロジェクト全体の中で大きくつくるだけでも違うのではないかと思います。

次に横に評価の次元を並べるだけではなく、評定のAとBの違いは何かと自覚的になる。これはリサーチの論理構成を引き抜いたものですが、5段階で評定の意味、内容を項目化する。こういう感じで、5～1のグラデーションをつけていく。自分は何をもって論理、構成を見ていこうとしているのかを明文化していく。そうすると、自分は論理構成についてどういうふうにとらえているかが、自分にも、学生にもわかってくる。そして、学生にはこういう感じで評価をすると見せる、伝える、そういうやりとりを通して、学生は何を頑張ったらいいか、どのような観点の力を付けることが目指されているかがとても明瞭になってきます。こうして授業やプロジェクトが、より良い形になっていきます。

評価の問いの二つ目ですが、「評価によって授業/プロジェクトが変わる、修正されるという観点は入っているか」。ベンジャミン・ブルームの評価論。診断的評価から形成的評価、総括的評価へ。評価は最後にするだけではなく、途中でもしていくということです。目標とする方向に学生が取り組んでいるかどうかを途中でチェックしながら、授業やプロジェクトを軌道修正していって、最後、私たちが設定する目標に学生を促していきます。

「授業のPDS/プロジェクトのPDCAサイクルは回っているのか？」

Plan-Do-See といっても、PDCA といってもいいですが、計画から実施、評価のサイクルが流れているか。プロジェクト科目を同志社大学が6年やってきて、この中での評価の結果、次年度に課題化するものがどう出されてきたか。プロジェクトがどういうふうに改善、発展してきたかを、この後、お聞かせくださるのかなと思いますが、もちろん授業レベルの小さい改善もあったと思います。プロジェクト全体の年度単位のPDSサイクルもあると思います。どう回ってきたかということです。アクティブラーニングの取り組みの経験では、授業デザインと学生が頑張ったことだけの報告会に終始していて、次の授業、次年度に向けての課題、授業デザイン、評価デザインが細かく出てくることがなかなかありません。学生の報告を楽しく聞くのですが、評価を考えると、いつももどかしくなるのも正直なところです。ただどこの大学でも、それがしっかりできている段階ではありませんので、これから大きく課題になっていくということだと思います。

PDS サイクルを回していくためには、簡単なものでいいですが、実践をおこなった先生や担当者が集まって、自分の取り組みはどうだったか、何が問題点で、次年度はどういうところを改善したいかを出していく、組織的には何を目指していたかを共有する、組織レヴェルと個人レヴェルとをつなげる、そうした反省会があればいいと思います。そして、次年度の授業につなげていく。このようなサイクルが組織的に欲しいところです。

評価の問い4、「カリキュラムの中で位置づいているか？」

単位を与えて科目として位置づけている。4年間、6年間の中で、この科目は何かということが、しっかり問われないといけません。最近の流れでは、ラーニングアウトカム、学士の質保証に密接に

かかわってきますが、直接評価は授業の一つひとつの中で、学生がしっかり学ぶ。プロジェクト科目は、一つひとつの科目として授業の中で直接評価がなされると思います。124単位に相当する科目を学生が受けて集大成したものが4年間の学習成果として成り立つわけです。一つひとつの単位、授業の中での評価が、いい加減なものであれば、いくらGPAを計算しても意味がありませんので、一つひとつの評価にかかわるものをどれだけしっかり検討していくか、これが学生の 4 年間、6 年間の学びと成長を考えていくうえで重要だと思います。

山田礼子先生の説明を拝借すると、間接評価は、授業の中での取り組みだけではなかなかわからない学生の成長を評価するものです。アンケート調査、インタビューまでできれば最高です。調査では、授業外の学習時間はどれくらいか、1週間どれくらい勉強しているか、どれくらい本を読んでいるかと、学生の経験としてのクラブ活動、アルバイトなども尋ねたりしますが、いずれにしても授業一つひとつの中でわからないこと、キャリアビジョン、形成なども問います。そして、授業の直接評価と重ねて学生の学習状態、経験の深化などを評価していきます。学生の学びと成長をエビデンスベースで見ていこうと考えていくと、内部質保証をはじめとする IR の話にもつながってきます。

直接環境と間接評価の関係をまとめますと、入学時から4年間、6年間、個別授業が重なっていって、カリキュラムが構成されていく。その系統性が問われる。系統性がなければ、カリキュラムの構造が悪いということになります。授業とカリキュラムの関係、認知の段階、ステップアップを考えていくことが、直接評価の議論であります。プロジェクト科目もそうですが、初年次教育、情報教育、一般教育、専門教育がありますが、この関係をちゃんと構造化できているかが問われます。これはカリキュラムの話です。初年次教育だけの満足度、評価をするのも大事ですが、他方で、初年次教育をやったからこそ、他の科目、次の学年で学生がよりよく学ぶ、成長するとなっているかが検証、検討されないといけない。こういう時は間接評価を使いますが、そういう話はプロジェクト科目でもあると思います。初年次教育だけの議論はし尽くされています。昨今の課題は初年次教育を受けた学生がその後いい形で学習しているか、育っているか、を見ていくことです。実際にデータをとっていっても、成果がどこに現れているか、わかりにくいと思います。わからないというのが現実だと思います。では何を指標にしていけば、それがつながった、効果があったと言えるのか。調査をして、何の観点でつながるか、何が成長するということになるのかを明示化しないといけません。そのような点をカリキュラムの中で見ていくことがポイントになると思います。

京都大学での事例ですが、京大の初年次教育、ポケットゼミというのがありまして、1年の前期に配置される高校から大学への学びの転換・導入教育です。先生の研究室で1年生にわかる程度の最先端の学問をゼミ形式でおこなう。全員が受けるわけではないですが、150科目近く、3000人のうち1500人近くの学生が受講します。教員や事務職員の並々ならぬ苦労の末成り立っています。学生の満足度も高くて、京都大学のよく報道される成功プログラムといわれています。しかし、私なんかが見ていますと、ポケットゼミそれ自体はいいのですが、始まって15年近くたったのですが、15年前と比べて学生が他の授業で教室での学びが格段によくなったとか、自学自習をもっとするようになったとか、そんなことを全然感じないんですよね。ポケットゼミの中で、学生たちが盛り上がっているのは知っています。しかしポケットゼミを離れたところで、学生たちはどうなっているのか。ポケットゼミを受けたことで何かが変わったのか。15 年前とあまり変わらないのではないか。これだけ労力とお金をかけて先生方を総動員して、いったいどんな成果を得ているのだ、そんなことがまったく議論されていないわけです。そこで今年京大生の 1-4 年生全体の学習実態調査を実施しました。京都大学でここまでの学習実態調査をしたのは初めてのことだと思います。ポケットゼミだけを尋ねる調査ではないのですが、ポケットゼミについても尋ねました。

思ったほど結果は悪くはありませんでしたが、ポケットゼミがポケットゼミだけで終わっているという傾向は予想通り見られました。ポケットゼミを受けた学生と、受けていない学生の学習状況の違いは、あるような、ないような感じです。大学の勉強、学問は高校までとは違うということくらいは学生たちに実感させることができていますが、それから先は弱い効果です。

こういうデータが出てくると、これは間接評価ですが、ポケットゼミっていったいなんなんだという議論になります。これが重要です。いったいポケットゼミ1つ1つの中で何が育てられているのか、何を目標にしているのか、そんなことを反省したりすり合わせたりすることもないまま、ポケットゼミは 15 年ちかく経ちました。そろそろ、次のステージへ行かなければなりません。これは、プロジェクト科目をカリキュラムの中で位置づける話の1つの例です。

アクティブラーニングは評価が難しいといわれます。アクティブラーニングの評価は、だいたいこの4つ（「学生の満足度」「ALのプロセスを評価している」「多重指標で成績をつけている」「ほか…ルーブリック、ポートフォリオといった評価ツールも利用して」）に分けて説明をします。知識習得型の一般的な講義とは違いますので、最後のところで評価をするだけではなく、途中をしっかり評価していく。ルーブリックとかポートフォリオとか、普通の授業でやっているような小テストでもいい。そして、多重指標で成績をつけていく。ルーブリックのイメージを持っていますが、多次元の評価指標を設定して、その授業で到達させたい目標に相当するものをすべて次元化して、凸凹でもいいので、しっかり評価をしていく。最後はAとかBとかでいいですが、途中は細かくつけていくことが重要です。

アクティブラーニングの授業の取り組みをいろいろ見てきて、すばらしい取り組みはたくさんあるんですが、授業者の悦に入った自己満足で終わっているのも、たくさんあります。学生が頑張るように持っていけるのは素敵ですが、評価は一次元でなされるものではないので、どういう成長をイメージして、このプロジェクトをデザインしたのかが、しっかり問われないといけません。

その時にアクティブラーニングの形式を評価していく、たとえば、しっかり参加した、コミュニケーションができた、学生同士で協調的に作業をおこなった、など形式で評価していくことが一方で重要ですが、他方で内容で評価していくことも重要です。町へいって、呉服屋さんでも都市設計でもテーマは何でもいいのですが、テーマを考えたり議論したりするのに、どれだけの基礎知識が必要なのか、あるところまで用語とか内容をしっかり知って、その上で考える、議論する、ということが問われなければいけないと思います。

こういう文脈で学習への深いアプローチ（Deep Learning）という論が出てきます。Ference Marton 先生を昨年11月に招聘して国際シンポジウムをおこないました。先生は、内容にこだわる話をされました。彼はアクティブラーニングといなわいで、Deep Learning 、Deep Approach to Learning といいますが、アクティブラーニングにも通ずる話です。「知識構造にこだわっていけ」と彼は言います。コミュニケーションひとつとっても、コミュニケーションの過程には「知」が媒介しています。知を持っていなければ、たとえおしゃべりの上手な人でもコミュニケーションはできません。そ

うした知を媒介としたコミュニケーションこそが、大学教育で目指されるものです。現場に出掛けていくと、知らない体系的な、抽象的な世界があるわけです。そういうものに精一杯足をかけて、わからないことは調べる、人に質問する、他者の違う考えが出てくる、自分の持っている知識をフルに総動員して異なる意見に返していく。これが大学で育てたいコミュニケーション力です。おしゃべりの中での日常知に関するコミュニケーションではなく、日常知からは遠い社会やある人びとの暮らし、仕事などについての抽象的、体系的、学問的な世界、それを支える知識を通してコミュニケーションをし、やりとりをすることが重要です。そういうことを彼自身がいっているわけではないんですが、内容にこだわってこそ学習が深まる、ということを大きく言っています。そういう紹介であります。エントウィスルという共同研究者が書かれた本が翻訳されています。とにかく学習が深くなる、発展するための知識構造の変化が繰り返し書かれていますので、手元に持っておかれてもいいかもしれません。

しかし、知識構造にこだわる、学習が深くなるとはどういうことか。わかったようで、よくわかりませんね。エントウィスルの本ではコンセプトマップが紹介されています。この作り方には学問的な手続きがありますが、ここではイメージを持てる程度の簡単な説明をします。たとえば大英帝国というテーマの歴史学の授業をしたとします。で、学期の途中に、「大英帝国について思い浮かぶものをポストイットで書き出してみなさい」と言ってみます。書き出していって線で結んで「それらがどう関係しているか、構造をマップにしてつくってみなさい」と言ってみます。このような手続きで仕上げられるものをコンセプトマップと呼んでいると理解してください。で、授業をしっかり聞いて理解していない学生は、こういう作業では何も書けません。書けても言葉だけがぽつんぽつんと出てきて、関係とか、構造を表現することができません。自分で表出していく作業は、学生があるテーマについて何を頭の中で理解しているかを見事に浮き彫りにします。プロジェクト科目の報告では、活動の結果ばかりが報告されますが、ぜひこういうものをやってみたらどうでしょうか。プロジェクトについて思い浮かぶものを出していく。一回やってみたら、いったい学生達が何を学んだのかが可視化されて、とてもおもしろいと思います。

専修大学ネットワーク情報学部プロジェクト教育の5カ条が書かれています。創造性、問題解決型とか総合的な能力の開発、横断的な知識の再構成、情報の共有・活用とコミュニケーション、成果物の公開。これらの中で、これはいいなと思ったのは「横断的な知識の再編成」です。プロジェクトの中で出てくる知識だけではなく、それ以外の科目群、学生がそれまで身につけてきたものをプロジェクトを通して目一杯絡めていく。そのためには教員やコーディネーターの介入がないとだめなのですが。で、そのような目標を実現できているかどうかは、先ほど紹介した、コンセプトマップのような可視化のツールを用いれば、見えてくると思います。コンセプトマップを作らせて、どこかに他の授業、前の学年で勉強したことが書き込まれてあったらとてもいい。授業者、科目担当者が「この学生はよくやっている、こんなことを考えている。プロジェクトのテーマを理解している」と見なせれば「評価A」となります。この目標はすばらしいと思います。他のプロジェクトでも入れていってほしいなと思います。

パフォーマンス評価というのは、能力、技能、プロジェクト・リテラシーを評価する時に避けられない評価法となってくるでしょう。コミュニケーション力があるとか、頭がいいとか、口ではいろいろ言えますが、どういう意味でコミュニケーションができるのかはそれだけではわかりません。そこでパフォーマンスを課題化して、課題にどう取り組むか、どう達成するかで、点数をつけます。よく紹介され

るのはフィギュアスケートですが、同じ共通の課題を出して滑る。共通の評価基準で採点していく。総合点何点と出てくる。こういうものも、あと数年すれば教育の中でふつうに使用されるようになるのではないかと思います。うちの松下佳代教授著の『パフォーマンス評価―コミュニケーションの思考と表現を評価するー』という本があります。このテーマは初等、中等教育が中心となりますが、わかりやすく書かれていますので、ご紹介しておきます。

大学では、たとえばOSCE（オスキー、理学療法版）でパフォーマンス評価が取り組まれています。松下佳代教授が藍野大学の平山朋子先生と共同で取り組んでおられて、「理学療法教育における自生的FD実践の検討―OSCEリフレクション法を契機として』という論文を書かれています。理学療法の学生が実習にいく前にどれくらい実技を身につけているか、実際にやる上での知識を身につけているか。パフォーマンス課題を与えて点数をつけていく。実際の臨床場面の課題を通して学生が課題にしたがって取り組んでいく。それを評価者が見ていく。この学生の臨床技能は「いい」「悪い」「ちょっと悪い」と判断を行っていきます。

評価はどうしても、しんどいものです。同志社大学のプロジェクトで、評価という問題がテーマに掲げられたのは意義があると思いますし、そこに真正面から取り組まれたことに敬意を表します。評価を組織的に実現していくことはとても大変で難しく、今日お話したようなことがあちこちで聞かれるようになるには、まだ数年かかるのかなと思ったりしています。私の話は以上です。ありがとうございました。

司会　ありがとうございました。

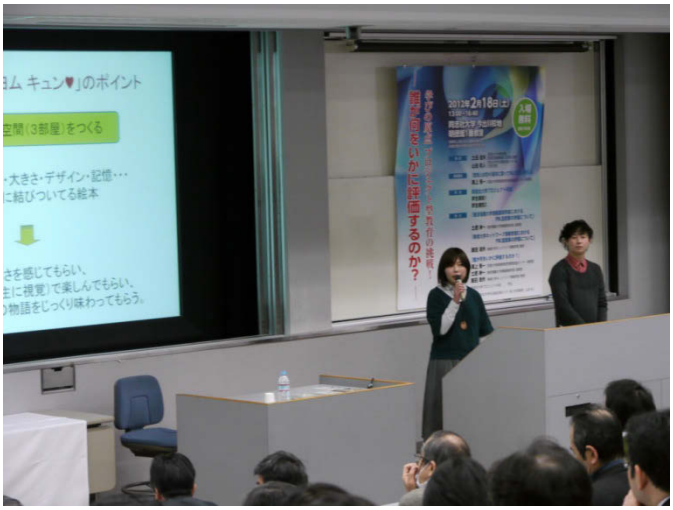
司会
同志社大学では2006年度より学生が課題に取り組み、それを探究、追及するためにチームでプロジェクトを遂行する社会的な学び、PBL型のプロジェクト科目を設定しております。今年度は京田辺校地10科目、今出川校地12科目、私を含め、全学部全学年から260名あまりの学生がそれぞれのテーマに取り組みました。本日はプロジェクト科目を代表して2つの科目を紹介します。最初の発表です。同志社大学社会学部社会福祉学科3年・川崎裕未さん、同志社大学経済学部経済学科3年・金丸誠克さんです。よろしくお願いします。

◇学生発表１
２０１１年度プロジェクト科目
「心ぬくもる「絵本」に出会う～絵本ソムリエ・プロジェクト～」

同志社大学社会学部社会福祉学科３年　川崎裕未
同志社大学経済学部経済学科３年　金丸誠克

「絵本ソムリエプロジェクト」の発表をさせていただきます。このプロジェクトのテーマは「絵本は心のごちそう」をテーマにイベントをプロデュースするものです。まだ出会っていない感動と教養を深めるきっかけになる絵本を通して文化創造をめざして集まったメンバーで取り組みました。この授業でどのようなことをしてきたか。最初にポスターセッションを絵本について自由なテーマで、3グループで行いました。7月、新風館でプレイベントとしてメンバーや友人だけの小さなイベントを行い、絵本についての関心を高めました。そして秋学期に成果報告会を迎えました。このように春学期で絵本について触れ、絵本について考えることで絵本の魅力を、より知ることができたと思います。秋学期には最初にラジオ番組を制作し、その後にこれまで深めてきた絵本の魅力を伝えるためのイベントを企画しました。本日の発表では秋学期に行ったイベントを中心に発表させていただきます。

イベントについてですが、私たちは「EHON！ミル　ヨム　キュン」というイベントを新風館3階で行いました。このイベントのテーマは来ていただいた方たちに、絵本が身近にある空間を感じ、絵本の魅力を知っていただくということです。私たちはこのプロジェクトを通してたくさんの絵本に触れ、たくさんの絵本の魅力を知りました。そしてそれをたくさんの人に伝えたいという思いが生まれました。大人になった今だからこそ、もう一度絵本を手にとってほしいと思いました。なぜなら絵本のある暮らしは、毎日をより快適に変えると思ったからです。絵本は生活に必ず必要なものではありません。しかし音楽や映画のように、あった方が毎日の生活をより豊かに、より快適に変えるものであると思います。絵本にもそのような魅力があるのではないかと私たちは考えました。そしてその思いを、来ていただいた方たちに伝えるために、イベントとして絵本から空間をつくることを企画しました。絵本にはお話、形、大きさなどが有機的に結びついています。絵本の魅力を知ってもらうためにそれらを感じてもらい、実際に絵本を読むということをしてほしいと考え、それに見合った空間をつくりました。



まず最初に、懐かしさを感じでもらえるような空間をつくり、次に、見て楽しんでいただけるよう、五感で楽しむ空間をつくりました。そして最後に絵本をゆっくりと味わっていただくために、物語を時間をかけて味わえる空間をつくりました。写真をもとに具体的にいいますと、最初に絵本型のパーテーションがあって、その中に懐かしさを感じられるような絵本を配置しました。2の部屋では白い壁の中に扉がたくさんあって、その扉を開けると絵本が出てくるしかけになっています。1の部屋の「くぐる」、2の部屋の「遊ぶ」というのは、わくわく感を感じてもらえるものであり、より子どもの頃を思い出しやすくなるものだと思います。そして最後は、絵本をじっくり読むための座れる場所や、天蓋をつくって小さな空間をの中で絵本の世界にひたっていただくスペースを作りました。

実際にイベントの動画を見ていただきます。当日はたくさんの子どもたちが来てくれました。私たちはイベントを、大人向けと考えてつくったのですが、子どもたちがたくさん来てくれて楽しんでくれたことで大人が子どもの頃を思いだしやすくなる効果もあったと思います。子どもたちがいるだけで雰囲気もやわらかくなったと思うので、子どもたちが来てくれたことで、よりよいものになったと思います。当日来ていただいたお客さんからの「面白いイベントですね、このイベント、今度は孫をつれていきたいんだけど、いつあるの？」などの声は本当にうれしいものばかりでした。

次はイベントができるまでのプロセスについて発表したいと思います。私たちは秋学期に入ってからも、引き継ぎ絵本に触れてきました。絵本には夢、希望、勇気が溢れています。そしてそれは幼い頃の子守歌であり、大人になってからの応援歌でもあると考えました。そして自分たちが感じた絵本の魅力を、一人一冊お気に入りの絵本をラジオで紹介するという形で伝えてきました。その時にどのように絵本を紹介するか、何を一番伝えたいかを考えることで、絵本を、より深めることができたと思います。私は『ミリーのすてきなぼうし』という絵本を紹介させていただきました。この絵本を読んで想像力の楽しさを感じることができました。またマイナスに思えることでも発想の転換やちょっと考えを変えるだけでプラスにもなるのだということを、この絵本から感じたので、それを伝えました。

他には、ツイッターでも絵本を紹介したり、イベントの詳細も進行状況なども伝えてきました。このように深めてきた絵本の魅力を伝えるイベントで、私たちはどのような絵本をイベントに使用するかを考え、絵本セレクトの3つの物差しを決めました。

1の部屋では懐かしさを感じてもらうことが目的なので、誰もが昔、読んだことがあるような絵本、たとえば『ぐりとぐら』『スイミー』などを選びました。そして2の部屋では、見て楽しんでもらえるよう、見た目重視の絵本がよいと考

えて、最近では絵本をインテリアとして扱うこともあるので、インテリアにもなるような絵本を選びました。たとえば『まってる』や『まるまるまるのほん』などの絵本です。3の部屋では物語をじっくり味わっていただけるよう、内容を重視した、ゆっくり読みたい本を選びました。メンバーみんなが実際に読んで実際に、よかったと思った本を出しあい、その中から選びました。いろんな絵本に触れていただけるように、大人向けや感動っぽいとジャンル分けをして内容に偏りが出ないようにしました。たとえば『となりのたぬき』『世界で一番の贈り物』などです。

このイベントで使用した絵本はリストにしてお客さんに配付しました。配布資料にある絵本リストはその実物です。絵本の魅力を伝えるために、どのような空間であればいいかをメンバーで何回も話しあいました。メンバーで考えた会場のイメージを、絵の得意なメンバーが何回も考えてくれて、最初のイベント・スケッチが出来上がりました。これは部分的なもので、原案、イラストとともにメンバーが作成しました。長い試行錯誤の後に、こんな空間にしたいとできたところで、今度は、それを形にする作業に入っていきました。自分たちがやりたいと思ったものを、「できる」、にするために学外の方のご協力もいただきながらつくっていきました。これは実際に家具工房にいってメンバーが作業している写真です。工房の方にやり方を教えていただきながら作業をすすめました。1の部屋の絵本型のパーテーションや2の部屋の扉つきのパーテーションをつくりました。そしてこれが扉の実物です。中の絵本となっています。見ていただくとわかるように扉の絵や大きさは中の絵本をもとに一つひとつ考えてあります。 そして次の準備風景です。よりよいものをつくるために本物の木や丸太を使いたいと考え、それを造園所の方にご協力していただくことで実現することができました。またイベントで使用した落ち葉はメンバーが実際に御所にいって拾ったものを使いました。

このように学外の方の協力も得ながら、作業は自分たちで行ってきました。そしてこれが会場設計の写真です。パーテーションをつくるためにメンバーが毎日のように工房に行かせていただいてつくりました。自分の背よりも大きな木を伐ったり、初めて見た道具を扱ったりと、大変でもあったのですが、皆が頑張ってつくったものが、どんどん組み立てられ、今まで想像でしかなかったものが、どんどん目の前にできていくことに感動したのを覚えています。前日の運搬などはメンバーの友人などにも手伝ってもらうなど、周りの方々のご協力に本当に感謝しています。

会場が完成すると本当にお客さんが来てくれるのか、お客さんを楽しませることができるのかという不安も出てきましたが、それと同時に早くお客さんに来てほしい、お客さんに見てほしいという思いも生まれ、ワクワクしました。イベントが終了後のアンケート結果から、自分たちのイベントがどうであったかを考えました。来ていただいた方たちの8割以上の方たちが「絵本を好きだ」と思っていること。しかし、その割合に比べて実際に最近、絵本を読んだ人は少ないようでした。そしてこのイベントを通じて絵本への関心を深めていただくことができました。絵本のよさを知ってもらい、絵本へ関心を深めてもらうことが、メンバーの願いだったので、この結果は、とてもうれしいものでした。アンケートでいただいた中には、「久しぶりに家の絵本を読んでみようと思いました」というコメントもあり、私はとてもうれしく思いました。イベント中で絵本に触れ、絵本への関心が高まったとしても、それがイベント中だけで終わるのではないかという思いがあったからです。イベントが終わって日常に戻った時も、絵本への関心を持ち続けていただけたら、このイベントとしては成功ではないかと思います。

最後にこのプロジェクトを通して、私たちはたくさんの経験や学びを得てきました。普通の授業では経験することのないような学外の方、お客さんとか協力してくださった方とのかかわりの中でプロジェクトへの思いを強めることができたと思います。そして自分たちがこのイベントをやりたいと思っ

ても自分たちでできることは限界があることを知り、またそれを学外の方たちの協力によって実現することができ、達成感を成長もえることができたと思っています。そのターニングポイントの一つとしては、学外の方たちが私たちの思いをしっかりと受け止め、理解してくださった上で協力してくれているのだと、それを感じた時だと思います。それによってメンバーに責任感も生まれ、プロジェクトに、より積極的に取り組めるようになったと思います。また当日いただいたお客さんたちの声や笑顔も、私たちの達成感につながったと思います。このプロジェクトを終え、以前より、もっと絵本の魅力を知ることができ、絵本をもっと好きになりました。これからも、いつまでも絵本を身近な存在に感じていたいと思います。そしてうれしかったことや悩んだこと、大変だったことなど、このプロジェクトを通して学んださまざまな経験を、これからの生活に生かしていきたいと思います。以上で発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

司会　ありがとうございました。次のプロジェクトの発表です。

◇学生発表２
２０１１年度プロジェクト科目
「京都の織物文化活性化計画！～織物の伝統技術について考えよう～」

同志社大学文学部英文学科３年　田中菜月
同志社大学社会学部教育文化学科３年　西川久美子
同志社大学政策学部政策学科２年　平城奈津子

プロジェクト科目「京都の織物文化活性化計画！」の西川、平城、田中です。私たちは京都の伝統織物の「錦」を活性化するために、この1年間、活動してまいりました。

はじめに「錦」とは金へんに「帛」とかくように金に値する世界最高峰の絹織物です。その特徴を3つ上げますと、一つ目は1200年以上の伝統があり、京都、西陣が最大の産地であることが上げられます。2つ目が、芸術性です。光のあたる角度によって表情が千変万化することから フランスでは光の織物と称されています。こちらの「瀬戸の内海」という作品には色数が100色以上使われており、それらが見事に調和していることから色彩の交響楽ともいわれています。3つ目が、技術です。主な工程は12工程あり、70人以上の職人さんがかかわっておられ、これらの技術は日本の高度な技術力の根幹となっています。このような京都の伝統織物「錦」を活性化させるという目標が高々と掲げられたプロジェクトだったわけですが、その目標に至るまでのプロセスや私たちか実際に取り組むべき課題というのは全く白紙の状態でした。したがって私たちは、春学期は現状を知ることが大事だと考え、春学期の授業のほとんどを工房見学に費やしました。その中で実際に見た「錦」のすばらしさはもちろんのこと、職人さんの洗練された、流れるような手の動きや、一つひとつの道具が本当に芸術品のようであり、本当に感動しました。また、職人さんの仕事に向かわれる真剣な眼差しや仕事に対する姿からも、多くのものを学ばせていただくことができまた。しかし一方で、杼をつくっておられる職人さんは京都で最後の方で、機大工さんは京都で一軒、というように伝統織物の世界は非常に厳しい現実にさらされていることも学びました。このような現実を図表化したものが、次のようなものです。

着物文化の衰退や大量生産、大量消費社会の中で安価な織物が増加したことから、ここ数十年間の間に需要が大きく低下しました。そ

の結果、職人さんの仕事が減少し、それが不安要因になって後継者が不足し、衰退、消滅しようとしています。そこで京都では、値段を下げて需要を上げることはできないか、と機械化が進められ、海外での生産も進められた結果、伝統織物の質が低下し、織物文化そのものが衰退するという現状がおこっております。

では、このような状況において活性化とはどういうことなのでしょうか。私たちはこの方法を考える中で活性化とは何か、また何をもって活性化するのかという根本的な壁にぶちあたりました。その中で多くの方々の意見を伺ったのですが、最も大きかったのは、需要を上げるために商品開発をすればよいのではないかというものです。確かに商品開発は効果的な方法ではあると思います。しかし伝統織物の質を下げずに商品開発することは非常に困難なことですし、プロジェクト科目の1年間という、あたえられた時間の中でできるものかといわれると、そうではない。また私たちが最も疑問に思ったのは需要を上げることだけが活性化の形なのかということです。創造的な視点をもって、もっと活性化の可能性があるのではないかということを模索しました。

その中で私たちが注目したのは現在の錦織物の世界です。現在、錦織物の世界は一般の人からは遠い存在、閉じられた世界になっています。私も京都に3年間通っていたのですが、プロジェクト科目を受講するまで学校のすぐそばにこんな世界があることを全く知りませんでした。同志社大学のOB、OGの方にアンケートをとったのですが、4年間京都にいたにもかかわらず、織物のことをほとんど知らない方も多くおられました。したがって私たちに課せられた課題、それは錦織物の世界を開かれた世界にすることだという課題が見えてきました。そこで私たちは3つのアウトプットを実行しました。職人さんがこだわりをもって仕事をされているように、私たちもこのようなこだわりをもって3つのアウトプットに取り組みました。

一つ目のアウトプットは、2012年の錦織カレンダーです。皆さんのお手元に配付しておりますので、よかったらご覧ください。カレンダーの表面には錦織の文様を使用しています。裏面では職人たちたちの各工程を紹介しています。カレンダーは多くの人たちに気軽に使ってもらえ、錦織を日常に採り入れたものができます。2つ目のアウトプットは、寒梅館と新風館で行った展示会です。展示会のテーマは「It's a NISHIKI world. 錦 光の世界～」です。このテーマには私たちの一つの作品に多くの人たちがかかわっている、その強い思いと深い世界を知ってもらいたいというメッセージが込められております。寒梅館で5日間行われた展示会では、「錦」の作品と工房取材で撮影した写真パネルを展示し、5日間で約250人の方に来ていただくことができました。12月、3日間行いました新風館での展示会では、寒梅館での反省を生かして錦織物の作品の展示数を増やし、職人さんの写真パネルはもちろんですが、職人さんが実際に使用されている道具をたくさん揃えまして、実際に来ていただいた方々に手にとって触っていただくことが出来るようにしました。夜になると来場された方にペンライトをお渡しして錦織の変化を楽しんでいただく工夫もしました。新風館の展示会には約300人の方がお越しくださいました。展示会でのアンケート結果では職人さんの世界を今まで遠い世界だと思って接点のなかった人にも「展示会を通して職人さんと一般の人々が身近に感じられた」というご感想をいただきました。

3つ目のアウトプットは、地下鉄今出川駅での写真スライドショーを実施したことです。メンバーが京都市営地下鉄の方にプレゼンテーションを行い、実施することができました。地下鉄今出川駅の南改札口の展示スペースを使用することができました。この写真スライドショーでは私たちが今まで工房取材を通して見てきた職人さんたちの世界をスライドショーにしております。期間は約1週間でしたが、今出川駅のすぐ近くで西陣織に携わる多くの職人さんの工房を構えて、伝統を守り続けていることを知ってもらうことを目的にしました。ポスターも展示しております。この企画を通して今出

川駅の南改札口を使用するたくさんの方々に知ってもらうことができたと思います。このスライドショーは本日も地下鉄今出川駅で上映していますのでお帰りの際にごらんください。

1年間を通して私たちは4つの成果を得ることができました。1つ目は「錦」の世界を多くの人に知ってもらえたこと。知ってもらえたことだけでなく、展示会のアンケートを通して身近に感じてもらい、遠い世界だったものが近くの世界に感じてもらえたりすることにも成功したと思います。また、ありのままの「錦」の世界を持ってくるというこだわりも、最後まで貫けたのではないかと思っています。2つ目は錦織物文化衰退の危機感を多くの方々と共有できたことです。3つ目は伝統織物の課題が明確になったことです。4つ目は今出川校駅ショーウィンドーの継続的内容が実現したことです。

私たちは成果をえましたが、もちろんたくさんの反省点もありました。その中でも一番大きかったのは次のことです。私たちは「錦」の閉じられた、あまり知られてない世界を、オープンな風通しのよいものとして、社会の人々に対して発信することに成功しました。でも、たとえば展示会に来ていただい来場者の方が、私たちの展示に感銘を受けて錦で作られた小物を購入したいと思った時に、四条や烏丸御池などのアクセスのよい場所に実物の小物を展示して実際に購入できるというようなショップ、店は、現実にはありません。また「錦」の世界に感銘を受けて、この世界を自分も発信者として発信したいと思った時に、発信できるツールも今のところありません。さらに、実際に職人さんに会って話をしてみたいという時に、直接「錦」の職人さんにコンタクトをとるというシステムも今現在ありません。「錦」の世界の発信を受けていただい受信者の方が、今度は自分が発信者になりたい、また消費者になりたいと思った時に、そういう方々に対応するようなシステム、場所が不足していたなと思いました。これはこのプロジェクトだけでなく、今現在、織物の世界が抱えている問題なのですが、もしこのプロジェクトが、独自にこの受け皿をつくれていたら、受信者の方にもう一歩踏み込んだ「錦」の魅力を伝えたのではないかと反省しています。

たくさんの学びを、このプロジェクトを通して得ました。活性化とはどういうことでしょうか。豊かさとはなんでしょうか。伝統文化の継承とはどういうことでしょうか。このシンプルですが、根本的で難しい問いを私たちは自分たちに1年間問いかけ、また展示会やカレンダーを通して受信者の方に社会に対して問いかけてきました。そして個人的に自分なりの答えを見つけていただけたら、という思いで、1年間活動をしてまいりました。私たちなりの答えとしては、活性化とは、閉じられた、あまり知られてない世界をオープンな風通しのよい世界のイメージに変えることでないかと思います。また「錦」の世界は今の大量生産・大量消費の時代の風潮とは全く違って、人

手もかかるし、時間もかかる。全く正反対の世界ですが、長年の人々の思いが詰まっており、日本の美意識や日本独特の価値がギュッと凝縮された錦織物の世界を大切にすることは、改めて生活や文化の豊かさの一つだと実感しました。また、伝統文化の継承についても、今の時代は伝統があるからとか、歴史があるという理由だけでは時代に受け入れてもらえないと思います。伝統文化のエッセンス、根本的なものを見失わずに意識し続けて、時代にそった伝統文化のあり方とは何なのかを創造し続けることが、伝統文化の継承につながるのではないかと思っています。伝統文化の世界こそ、最もクリエイティブな世界であるべきだと、1年間通して感じました。

また、プロジェクト活動を行うそれぞれの場面で、行動力であったり、コミュニケーション能力であったり、総合的な人間力が要求され、個人的にもチーム全体としても、それぞれ成長できたと思います。しかしこのプロジェクトでないと学べなかったことがたくさんあります。一つ目はチームワークについてです。ある金箔をつくる職人さんに「仕事のやり甲斐は何ですか？」とお尋ねしたことがありました。その職人さんはこのようにお答えくださいました。「自分がつくった金箔だけが褒められても全くうれしくないです。自分が最大限の仕事をして最後にできあがってきた織物がすばらしかった時に初めてやり甲斐を感じます」と。この言葉にはチームワークというもののエッセンスが凝縮されていると思います。一人ではできないことをチームだったらできるというような可能性や、チームワークの重要性を痛感しました。また今回、受信者ではなく、発信者として一歩踏み込んだ立場から、日本文化に携わさせていただいて、日本っていいな、「錦」っていいなと心底、思いました。今の時代も、これからの時代も、色々な価値観が混沌としている時代だと思いますが、その中で日本の魅力を鮮明に感じることができ、私たちはとても幸せだなと感謝しています。ご清聴ありがとうございました。

司会　ありがとうございました。

司会
大学の学部単位でPBL型授業に取り組んでこられた二つの大学様から報告をいただきます。10年を越える取り組みです。最初は東京電機大学情報環境学部准教授の土肥紳一先生より、よろしくお願いいたします。

◇「東京電機大学情報環境学部におけるＰＢＬ型授業の評価について」

東京電機大学情報環境学部准教授　土肥紳一

東京電機大学情報環境学部の土肥です。本日は報告の機会を与えていただきましてありがとうございます。私どもの学部は2001年に、1学部2学科で開設しました。現在は、1学部1学科4コースになっており、総学生数は約1000名の、こじんまりした学部です。過去に3回GPに採択され、同志社大学さんとの連携にも上手く結びつきながら、これまで進んで来ました。学部の特色をいくつか紹介しますと、セメスター制を導入しており学年がありません。必修科目もありません。事前履修条件となっていまして、選択科目です。つまり、ある科目を事前に学んでおかないといけない科目の縛りはありますが、すべてが選択科目です。さらに学費単位従量制を設けており、1単位の単価を設けることによって、たくさん学べば学ぶほど、学費が必要になる仕掛けになっています。授業時間は1コマ50分、75分授業を併用して来ましたが、2011年からは1コマ50分授業に統一しました。プログラミング入門教育におきましてはSIEM（ジーム）を導入し、一般的にPDCAサイクルになりますが、それを授業の中に採り入れながら進めてきました。そしてプロジェクト科目の導入、これらを特色として学部の運営を行っています。プロジェクト科目には、大きく二つあります。一つは「基礎プロジェクト」、もう一つは「開発型プロジェクト」です。これらのプロジェクト科目を学部発足時から導入してまいりました。

「基礎プロジェクト」は、比較的労力とか時間が少ない中で取り組める内容を扱います。企業、自治体、学内の先生方からテーマをいただいて、教員は学生とのとりまとめ役で進めています。2セメスターを履修することが前提ですが、中にはテーマを途中で変わる方もございます。2～3名のグループに分かれて取り組みます。「開発型プロジェクト」は、「基礎プロジェクト」と比較して時間等が長くかかる内容を扱います。テーマの募集は企業、自治体、学内の先生方がベースになりますが、2セメスター連続して受けていただきます。科目はA、Bで区別していますが、履修順序はどちらでも構いません。少人数のグループで実施していきます。

基礎と開発、大きくどう違うか。「開発型プロジェクト」は、「卒業研究」と対等の扱いになっています。「基礎プロジェクト」は当初、2年次から開講しましたが、諸般の事情で3年次に移しました。本

日のシンポジウムでは、「基礎プロジェクト」の内容が合っていると思いますので、その辺を重点的にご説明させていただきたいと思います。

PBL科目のこれまでの歩み。「基礎プロジェクト」は、2002年から2年次で開講しました。続いて、3年次で「情報環境プラクティス」、4年次で「卒業研究」または「開発プロジェクト」と続いていました。しばらく運用を行った結果、「基礎プロジェクト」は2年次での開講がきついということで、2006年から2年次と3年次を入れ換えて開講しています。2008年から「年次縦断プロジェクト」を開設し、これは2008年2月に開催された、同志社大学さんのシンポジウムで報告しました。2011年4月には、私どもの学部だけではなく、全学的にPBL科目に取り組もうということで、教育改善推進室が開設されています。今後の予定では、「基礎プロジェクト」を履修するためには3年次で概ね70単位を取得していることが条件でしたが、曖昧さを省き、68単位に明文化します。さらに「卒業研究」と「開発型プロジェクト」の区別が受講する側に分かりにくいということで、「卒業研究・開発型プロジェクト」の名称に一本化することになります。

プロジェクト科目の取り組み。現在、4つのコースありますが、コースを横断するコース横断型プロジェクトになっています。学生にとっては、異なるコース間のコミュニケーションが発生します。視点の違い、学びの目的が違うので、色々な視点の人と話し合って進めていく、融合した専門分野でもあります。そのために必要な空間や場を提供できています。さらに、教員とのコミュニケーションが、この授業の中で身についています。また、教員同士のコラボレーション等の促進にもつながっていると思います。 4つのコースを横断した形で、皆で寄って集まってプロジェクトを構成する取り組みとなっています。

「年次縦断プロジェクト」は、全学年次を対象に行われます。先ほど、「基礎プロジェクト」は3年次、「開発型プロジェクト」は4年次と申し上げましたが、学年を取っ払って全学年次を対象に開設しています。このプロジェクトの目的は、異なる年次のコミュニケーションをはかり、年次で分けるのではなく、先輩、後輩の関係を作って行こうということです。学生は、年次による役割の変化、チームの中の自分の役割や立ち位置を知ることができます。高学年次の学生が低学年次の学生を指導します。低学年次の学生は先輩の姿を見ながら学びます。入学してから1、2、3、4年次と進行しいくわけですが、その中で色々な年次の人が混ざって、「年次縦断プロジェクト」を構成しています。

現在、「基礎プロジェクト」「開発型プロジェクト」「年次縦断プロジェクト」の3つのプロジェクト科目が、進行しているとご理解いただければと思います。この図は、学部開設当初からの履修者数の変化を示したものです。「基礎プロジェクト」が2年次開講ということで、2002年から履修者が出てきます。この谷は年次を入れ換えた影響が出ていますが、定員増の影響を受けて、「基礎プロジェクト」の履修者数が途中から伸びています。現在は、約240名のうち約200名の学生が受講しております。「基礎プロジェクト」の成果報告は、パネルを使って発表します。テーマの中には、コンピュータを使った音の解析や、ITと農業を結びつけて食の安全について取り組むものもあります。このスライドは栽培用のユニットを示しており、

人工的に栽培した野菜を展示しています。

何をどんなふうに評価しているか。「基礎プロジェクト」の評価は、主査と副査の役割分担を設けています。副査は評価項目が4項目ありまして、この表は2009年まで使っていた評価項目です。副査は(a)(b)(c)(d)の項目、すなわち「ポスター、プレゼンテーション、書類等の完成度」「発表方法と発表内容」「成果物の魅力、オリジナリティ、アイディア等」「成果物の完成度」、これら4つの項目を評価してきました。その後、質疑応答も取り入れました。成果物の完成度は、主査でないと分からないとの指摘があり、こちらのように評価項目を変更しております。副査は、点数を5段階評価します。主査は①～⑩の評価項目があり、この中で副査が評価した(a)(b)(c)(d)の項目が、主査の⑤、⑥、⑦、⑧の評価項目に対応しており、副査の評価を参考値とします。主査は各10点、合計100点満点で点数を付けます。

「基礎プロジェクト」の⑤ポスター、プレゼンテーション書類等の完成度ですが、中にはソフトをつくる人もいますが、作りっ放しになってスケジュールがうまくいかないのではないかという心配もあります。⑥発表方法と発表内容は第三者にわかりやすく発表できるかどうか、⑦収穫物があるテーマの試食とか発表の内容、成果物等の魅力、オリジナリティは創意工夫とか、なるほど思わせる工夫、⑧成果物の完成度等は目標が達成できているかどうか。場合によっては、ゴールに達しないこともありますので、プロセスも評価として重要であり、こういうことを参考にして主査が点数を付けます。主査は、①計画が内容にふさわしいかどうか、目標設定が高すぎたり、低すぎたりしていないか。②担当している人が内容を理解しているか、目標から逸脱していないか。③主体性を持って取り組んだか。一生懸命取り組んでも壁にぶつかって進めないことも起こる。これらのことを主査が評価します。④進捗状況の報告は、どこまで進んでいて、どういう状況かをグループごとに報告してもらいます。⑨⑩については、特に述べることはありません。

「卒業研究」「開発型プロジェクト」の評価。「基礎プロジェクト」と同様に、副査と主査が役割分担を行っています。副査が30点の持ち点、主査がその点数を参考値として利用します。副査の結果が主査に届き、その内容を参考に点数を付けます。あくまでも主査が点数を決めるシステムになっています。

「年次縦断プロジェクト」は、参加した時間をベースに累積して評価を付けます。合計の活動時間は、1時間あたり4ポイントの重みがあります。15時間活動すると60点、つまり合格となります。「年次縦断プロジェクト」は、別途、結成(継続)届が必要です。単位数は1単位、「卒業研究」、「開発型プロジェクト」と同時履修することも構いませんが、集中的に活動する場合は、1日の活動時間を2時間に制限しています。こういう方法で評価を行っています。

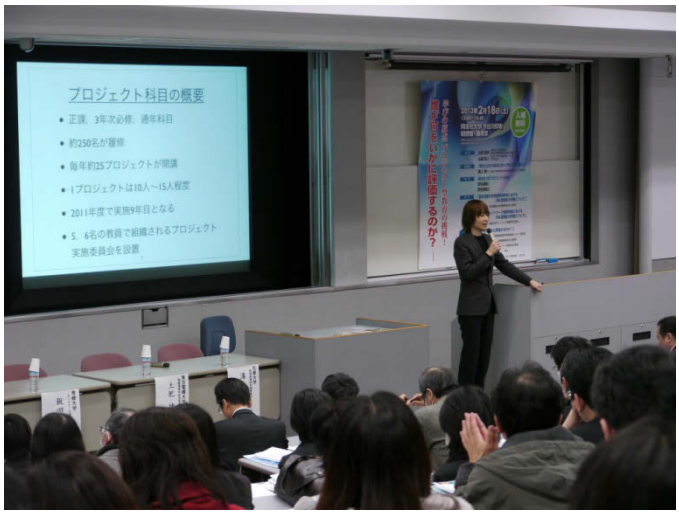
今後、評価できれば良い項目ですが、複数の人が集まるとできることがあると思います。一人では、なかなか気が付かないことでも、複数の人と話をするとアイディアの創出や、問題を解決できることがあると思います。そういうものを、どう測れば良いのか。また、壁にぶつかった場合、「何でなんだろう？」ということが良く起こります。ソフトウェアを開発していて、上手くいかない。それは何故なのか。お手本を見ても、市販の書籍を真似ても上手く行かないことがあります。多くの場合、ささいなことが原因ですが、知識不足のため問題から抜けられない。しかし、本人にとっては大きな壁になります。「なぜ？」を探る能力を測れる必要があります。その他に、プロジェクト科目を受ける前後の違いに、本人は気付いていると思います。ここに、座学では学べない、プロジェクト科目ならではの効果が隠されています。「何ができるようになったのか」を評価できるといいのかなということで挙げております。時間が来ておりますので、スケジュールの内容は省略させていただきます。

以上、東京電機大学情報環境学部のPBL型授業の取り組みについてご報告させていただきました。ご清聴、ありがとうございました。

司会
ありがとうございました。次の報告は専修大学ネットワーク情報学部におけるPBL型授業の評価について、飯田周作先生です。よろしくお願いします。

◇専修大学ネットワーク情報学部におけるＰＢＬ型授業の評価について

専修大学ネットワーク情報学部教授　飯田周作



専修大学の飯田です。我々の大学でどのような授業をしているか。ネットワーク情報学部の概要から簡単にご説明をします。2001年に設立し、1学年は250名、学部全体で1000人の学生がおります。ネットワーク情報学部は文理融合型といっておりまして、文型の学生も理系の学生もいます。受験の窓口も両方あり、科目が違って受けられます。対象とする分野が広く、情報学、情報系という学問を広く包含するような学部になっております。1学科制で、中で8つのプログラムが分かれて専門性を出しています。8つのプログラムは、どういうものがあるかといいますと、デザイン系のものが入っていたり、メディア系、情報システム系、経営系の情報も含んでいます。8プログラムになったのは2年前からですが、最初は3つのコースでした。デザイン系とシステム系と経営系でしたが、当初から広い範囲を対象として学部を構成していましたので、広い学問分野を一つにまとめるということでPBL型の授業をコア授業にして学部をまとめていこうじゃないかということで設計しています。

プロジェクト科目は重要な科目と位置づけています。正課であること、3年次必修科目であること。必修科目でプロジェクト科目をやるのは一つの特色であり、いいところも、悪いところもあります。通年科目で、250名全員が履修します。1プロジェクトの人数が10～15人。年間25のプロジェクトができます。教員数が27、ほぼ全員が受け持つ形になります。2011年度で実施10年目になります。ここは変えることなく、10年間続けてまいりました。

面白い特徴としては、5、6名の教員で実施されるプロジェクト実施委員会があります。これはプロジェクトにかかわるさまざまな雑用を引き受ける委員会です。私は当初からこの委員会をやっておりまして、委員長もしていますが、雑用係です。発表会の会場確保、電源、部屋割りの文句を聞きます。教員も学生も文句がある時は実施委員会に文句をいえばいいとなっているので、いろんな文句が私のところに入って来ます。チェックするということではなく、少なくとも何か問題があるとこの組織に話が入ってくるということで、面白い組織だと思っております。そういうものをおいてプロジェクトを回しております。

これが我々使い続けているプロジェクト科目5カ条の趣旨です。当初から守ってやっております。一つ目は「学生、教員から提案された多様なアイディアに基づいて問題発見、テーマ設定を行う」。創造性、問題解決型となります。「調査分析から実践、評価、報告に至るスケジュールを設定する」。ものごとを遂行するために必要なものを生む力、最後まで一貫してやろうということです。「諸学術の理論を活用する」。横断的な知識の再編成。これは重要なことだと思います。プロジェクトといってもいろんなものがありますが、大学でやるプロジェクトですから、そこには学術的なことが入ってないといけない。そこは意識してやる。「横断的な」というのが重要で、広い範囲の情報を扱っているので、ともすれば「自分はこれだけやればいいや」と狭いところに入りがちです。自分はプログラミングに興味かあるから、それだけをやろうと思って4年間を過ごすことは、意図しているところではないわけです。3年次に一度整理して、全体で、もう一回やり直してみる、情報の学問を皆で共有する意味があると思います。「横断的」という言葉を入れております。主として共同作業によって情報の共有活用とコミュニケーションをとる。チームでやらないといけないということです。チームワークであることが大前提です。これがプロジェクトの重要なあり方です。「調査や研究、製品、作品政策を行って発表する」。成果物の公開。これにしたがって忠実にやってきたということになります。

特徴は、必修科目であること。もう一つは教養と専門の区別がないことも大きなことです。27名の教員がプロジェクト科目を全員持つことになっています。教養、専門の区別はないことも面白いところです。学生、教員双方が企画を出します。企画を出して学生が応募する、そのテーマは学生も出せるようになっています。先生もやりたいことがある、学生もやりたいことがある。話しあいになって「これかやりたい」ということを主張して先生を説得することができれば、企画は通るということになります。発表会、報告会、成果物をつくらせる。こういうことを採り入れることも一つの特徴かと思います。

評価は、とても難しくて、教員の間で話をすると、おだやかならないことになるわけですが、真剣に話し合った結果、逃げているところもありますが、ポイントは通常の講義であれば学習目標があります。学習は目標があって、シラバス、到達度がある。到達度の測定をレポートなり、点数にする。これは通常の授業の一般的なことです。PBL型授業に対して同じ枠組みが有効かどうか。第1部の報告でも手掛かりをつかんだという感じですが、教員の側が、そこまでいっていない。同じように有効であるかというと、同じではないのではないかという考え方が支配的です。そうでないとすれば、どういう枠組みが必要になるか。

一つはアウトプットの質を見ればいいんじゃないか。アウトプットを見ればプロジェクトを、ほぼ総括できるのではないかという考え方があるかもしれませんが、我々は、それを採用していません。難しい問題で、成果のクオリティはさまざまな副次的な要因によって引き起こされることが多いのです。チーム編成が、たまたまうまくいく、うまい具合のタイミングで何かが入ってくる。そうするとアウトプットがいいものが出る可能性がありますが、10人の学生が評価されるだけの、価値のあることを全員

がやったのかどうかという話もある。わからないわけです。アウトプットが失敗した。これは評価できないのか。最悪の評価なのか。そうはいえない。アウトプットだけを見て、プロジェクトを評価するのは、うまくいかないのではないかというのが我々の結論で、これを採用していません。

見ることは何か。プロジェクトへの参加度合い。チームでやること。プロジェクトへの貢献度、何をもって貢献したかを明確にしないといけない。個人個人がどう成長したか。これをやる前と後で、どう違って、どう成長したかを見ないといけない。さらにチーム全体として、どう成長したかを見ることが評価の対象になるだろうと考えました。その選択としてルーブリックでやるとか、話しあいをして全体で明文化された詳細な評価尺度をつくるなどはやっていません。評価のガイドラインは存在しますが、専修大学は古い大学で、150年近い歴史ですが、教員が評価することは絶対的なことです。成績を評価する権利は教員に専ら任されていることであって、これを侵害することはいけないと。評価は教員に任されて、個人を単位に、その先生が成績をつけてくださいと。ただし成績評価のための材料づくりプロジェクト実施委員会を中心につくっていきます。材料づくりは何か。プロジェクトは狭い、10人の単位です。1年間やってその中で評価を行います。客観性を隠した評価としていいのか、悪いのかすらわからない。そうではなく、プロジェクトが何をして、どういう成長をしたか、どういうふうに役割分担をしたか、オープンに開かれてないといけません。そのために仕掛けをつくることをしようと。

評価の材料は何でしょうか。プロジェクトメンバー全員にタスクを割りあてるような仕組み。たとえば代表者委員会、プロジェクトの代表者が出てきて全体の運営をするような場所を作る。さまざまないくつかの仕事、タスクをつくってくださいといっています。常に自分たちがやっていることを振り返らせる仕組み。発表会、報告会、相談会などを多く実施します。プロジェクトの進行過程で、どういうふうになっているかを振り返らせます。「プロセスを言ってください」、「できた成果ではなく、プロセスを発表してください」と何回もいいます。スケジューリングの重要性を認識させる仕組みです。教員がこれらのこと客観的に評価しやすくするための仕掛けです。さまざまな報告会、相談会で紙でアンケート、コメント用紙に書いてもらいます。それを教員に集めます。教員は他からどう見られているかを資料として手元に持っていて、それを見ながら判断する材料にしてもらいます。

具体的な取り組みとして主だったものですが、1年間を通じて代表者会議でプロセス代表者を集めて現在、どうなっているか、何が問題になっているか、どういうふうに進捗しているかを話しあってもらいます。ゼミ室はどういうふうに使われるかも話しあわれます。毎年、代表者に任せられます。複数がどうやってうまく使っていくかを話し合ってもらい、7月中旬に相談会をします。その後すぐに中間発表会があります。中間発表会に向けた事前相談をします。中間発表では形式をきちんと決めてポスターをつくって発表します。教員がコメントをする。いきなり中間発表をすると辛口のコメントをしますから学生たちは自分たちのやってきたことを否定されたと考えてしまって意気消沈することがあるので、相談会をやって事前に見てもらってコメントをもらいます。よく実施員会に文句がきます。「学生がひどいことをいわれて落ち込んでいる。教員が事前に話しを聞けば、よくなるのではないか」、それでは1週間前に内々で聞いてもらっています。先生は内々だと優しくいってくれる。発表会になると厳しく言う。うまく改善されたと思っています。12月に発表会があって、本番です。盛大になるのが特色で、学部の授業からも学部運営に協力してくださった企業の方にも招待状をお送りします。また高校の説明会にぶつけて見てもらう工夫をしています。その後、プロジェクトの報告会をやります。報告会は内部の先生向けにやって、審査員がいて評価をする。ただし評価項目は決めていませんで、先生方がそれぞれの考えで評価をする形になっています。最後に1月末、

成果物として冊子をつくります。その時も決まった要求があり、必ずスケジュールに関すること、プロジェクトで考えたことを入れるようにしています。自分たちが何をやったかだけではなく、それに関して、どういうスケジュールで、どういう困難があり、どうフィードバックしてきたかという過程を書いていく。こういう仕掛けをつくるのが実施委員会の役割です。評価に関してはアバウトですが、一つ取り組んでいることとしては、皆が相互評価できるように全員にオープンにしてみせる。共有する場所をつくる。それに取り組んでいるというところです。以上です。

司会　ありがとうございました。

■パネルディスカッション「誰か何をいかに評価するのか？」

京都大学高等教育研究開発推進センター准教授　溝上 慎一
東京電機大学情報環境学部准教授　土肥 紳一
専修大学ネットワーク情報学部教授　飯田 周作
同志社大学社会学部社会福祉学科３年　川崎 裕未
同志社大学経済学部経済学科３年　金丸 誠克
同志社大学社会学部教育文化学科３年　西川 久美子
同志社大学文学部英文学科３年　田中 菜月
＜司会＞　同志社大学ＰＢＬ推進支援センター長・文学部教授　山田 和人

山田

溝上先生からPBLの評価について基調講演をいただき、東京電機大学の土肥先生から学部単位の選択科目で、専修大学の飯田先生からも学部単位の必修科目として設置されている各大学の取り組みをご紹介いただきました。実施する環境とか条件によってかなりPBLの性格が変わってくるものだということを、皆さんにご理解いただいた上で、ディスカッションした方がいいかと思ったので、ご報告をお願いしました。同志社大学の学生の報告に関しては自分たちが取り組んできた成果が一体どういうところにあるかを認識できているか、そこから互いに相互評価した時、どういうことが見えてくるか。さてここの議論の中でそうした課題が出てくるのか、出てこないのか。それも彼らの一つの大きな学びの総決算になるだろうという位置づけのもとに、今回はこういう企画を組ませていただきました。

しょっぱなからかなり強烈なインパクトのあるお話をいただきましたので、溝上先生から今の取り組み全体を見ていただいて、その中でお気づきになった点、こういうところが問題ではないかと思われた点、そのあたりについてまずいくつかポイトをご指摘いただいて、個別の議論に入っていき

たいと思います。事前に何も振っていませんが、厚い信頼関係のもとでお願いしたいと思います。一言まず。

溝上

同志社の学生さんの発表は、よかったと思います。さすが同志社の学生と言いますか、課題達成に向かっていく力強さを感じました。絵本を通して心をつなぐ空間とか、伝統文化に直に触れるとか、興味深い取り組みでした。私自身長く京都にいるのに、伝統文化への接点がないな、とかそんなことを思いながら聴いていました。

さて、PBLプロジェクトの評価についてですが。学生の報告、成果、取り組みについては勉強になりますし、面白いですが、科目担当者の話が全く出てきませんので、評価の話ができませんね。学生たちの取り組みに、授業として、科目として何が目指されたのか、どこに持っていこうとしていたのか、そうした目標とすりあわせが必要です。学生はよく頑張ったと思いますが、たとえば織物文化については面白いところがあったとして、そして織物についての現状への問いが出てくることもとてもいいことですが、ただ活性化とは何か、という問いを立てて、単なる伝統文化の継承だけではなく、伝統文化を継承すること自体の意味をもっと考えなければならなかったのではないでしょうか。これはたとえばの話ですが、そこまで考えて、伝統文化をテーマに取り組んだと言えるのではないでしょうか。伝統文化を相対化していく装置がない。私が授業者だったら風通しのいい世界にするとは何のことなのか。伝統文化は織物だけではなくいろいろほかにもあるでしょう、そこではどうなのか、などと問いを重ねながら課題を仕上げていくと思います。そういうところがあったのか、なかったのか。なかったと思いますけども、授業として考えていく時には、こういうことが必要だと思います。

東京電機大学の土肥先生と専修大学の飯田先生の取り組みは長年取り組まれてきたもので非常にまとまった、細かいところまで組織化された取り組みとして伺いました。多次元の指標を設定されて評価されている、これだけ評価、観点に取り組みながら実践を続けられているのは、すごいなと思いました。

私が冒頭でお話した評価の観点に絡めますと、2つ目の「形成的評価」が、あまり出てきませんでしたね。飯田先生のアウトプットは評価ではないですが、参加度合い、貢献の度合い、成長の度合いとかを強調されましたが、これは確かに学生がPBL型授業をやっていく時の評価指標にはなりますけど、最後の「総括的評価」に集中してしまっているきらいは、ちょっと聞いていて感じました。ただ飯田先生のお話の中で、中間発表会をする。それを形成的評価の一つとして理解してもいいですが、いきなり発表会に行くと先生の評価が辛口になる、事前の指導をしていくということが大事だとおっしゃられていたことは、形成的評価の話になると思いました。こういうことが先生方の一つ一つの授業の中でどのようになされているか、なども知りたいと思いました。

PBLプロジェクトの評価論になると思いますが、なぜPBLプロジェクトをおこなうのか。それはおそらく4年間の学生の学習を活性化させる、学生の学習力を上げるという目標があるからではないでしょうか。PBLプロジェクトを通して学生が変わると言うとき、何がどう変わっているのか。座学での学習態度は変わったか。学習時間は伸びているか。これらは間接評価の手続きになると思いますが、調査等で実施されれば、これだけしっかりされていれば、良い結果が出てくると思いますので、是非やられてはいかがでしょうか。また、調査をおこなうとなると、質問をどのようにするかということで PBL の効果に関する指標が明示化されてきます。これからも取り組みが発展することを期待しています。

山田

ということで評価されてしまいましたが（笑い）。今、おっしゃっていただいたことが、いくつか大きなポイントになります。アウトプットとかプロセスとか常に話題になりますが、アウトプットだけでは判断しない。じゃ、プロセスをどう見ているか、という話に自ずとなってくると思いますが、実は、そうではないんだと、飯田先生は反論なさるのでしょうか？

飯田

プロセスを見るんだというのは、一方では典型的な逃げの姿勢でもあります。「プロセスはどういうふうにしたらいいの？」というと「ちゃんと出席しているか、スケジュールはつくったのか、スケジュールにしたがってやったのか？」というあまり面白い話ではないと思います。そんなつまらないことでプロジェクト科目は評価されるべきなのか、というと、私自身の考えでは違うと思います。我々はプロセスを重視するといいながら、危ないところを探っているわけです。形式論に陥らないように、なおかつアウトプットだけに走らないように、その間をやりたいですが、それは何かということが、わからなくて、いろいろご意見をいただいて自分なりに整理したいと思います。一つ重要なことは、大学はどういうところかといえば、教員と学生が信頼関係を持って成り立つところであって、そこを重視しないといけないということです。教員の評価能力を甘くみてはいけない。そこは信用するが、教育は多面性を持っているので、あまりにもさまざまなものが出て来て、突拍子もないことにならないように、一定の枠をはめたい、ということだろうと思います。それが何なのか、ということは私自身も答えがはっきりとはないので、皆様方のご意見を伺いたいと思っています。

山田

何となく、うまく切り返されたような気がしますが。おそらくこういう形の授業に関しては常にそのことが問われてくるわけです。では、実際にどういうやり方が有効なのかに関していえば、いろいろなやり方が実際にはある。いろいろなやり方を、どういう形で位置づけて、学生側にも我々側にも評価をするところで一致点を見いだすことができるのか、ということが大事な項目になると思います。たとえば今日の議論でも出てきているのは、担当者がしっかりと全体を評価していく時に「観点をもちましょう」という形でやることは重要だし、そのことによって多くの学生に同じような形で教育の評価を進めていくことはできる。その意味では重要なことだと思うのですが、もう一方で、いろいろな構成があり、いろいろなやり方があることになるので、その時にどういうふうに研修のあり方を持つのかということが、かなり大きな意味を持ってきて、一律に研修会社にお願いする研修を100ぺんやっても役に立たないということは、全員が、わかっているわけです。一体、そこに向いているのは何が共通項なのか。何を互いの了解事項としていけるのか、ということが大事なことになってくると思います。それを専修大学では、こういうやり方、ある種、みえやすいやり方をとっている。中間報告の形でやっていく。もちろんそれ以外にも、同志社でやっているのはデジタルポートフォリオを入れながら、その中で互いに見ていくというやり方も、一つのやり方で、かなりの大学でもポートフォリオを入れる形で学習の深化を見ておられると思います。それをまたポートフォリオと組み合わせると別の意味合いが出てくるということとか。評価ツールを、うまく組み合わせていく、その評価ツールは我々からすると評価ツールになりますが、学生からすると情報共有のツールだったり、時間管理に役立つ有効なプロジェクトのためのツールなのです。実質的に彼らがツールとして活用したことが、結果的にも我々の評価ツールにもなってくるという、一つの「見える化」「可視化」という作業の場合に、最前線までいかないと何ともしようがないのではないかという気もしますが。溝上先生に、そのプロセス評価の「見える化」の問題が一つ。担当者に対して実践型の授業は、どういう形で研

修を行うのがいいかについてお願いします。

溝上
学習ポートフォリオは、面倒ですが使ってみると、評価には欠かせないツールだと思うようになると思います。学生の学習プロセスは、教員にはなかなか見えませんので、学習ポートフォリオはこういう観点で役に立ちます。学生ポートフォリオを学生が自分たちで利用して、学習や大学生活をマネジメントするというように用いられれば、最高です。学習ポートフォリオをつくらせて、それを生かして授業を展開するというのは、また別の難しい課題だと思いますが、そういう用い方もあります。

評価観が個人によってさまざまで、研修をやってもまとまらない。それはその通りだと思いますし、飯田先生の話でもありました。私はトップダウンでまとめてしまうのではなく、教員一人ひとりの個性を最大限尊重していくことが大事だと思います。各人の先生が「こういうふうに評価をしたい」「こういうふうに成績をつけている」「ここを大事にしている」などを出す場がきちんとあれば、組織は前へ進むと思います。ずれるところはお互い課題化して、共有できるところは大いに共有する。その構造化を重ねていくしかないのだと思います。

山田
同志社では、懇談会という形式をとっていますが、授業が終わりました時、学生は振り返りをするのに「担当者が振り返りをしないのはおかしい」と。懇談会では毎回テーマを決めて「評価をどういうふうになさっていますか？」「それぞれ出してみましょう」と基準を互いに出し合ってみて「そんなやり方をしておられますか」とすすめています。基本的にはそれぞれが取り組んでこられた時の指標等のさまざまなテーマを出して、それに対する達成度はどれくらいだったのかについて話し合います。ということを、まず一つは実施していますが、同時に学生自身の取り組み方が、専修大学とちょっと似ていいて、参加度とか貢献度とかが大きいだろうと思っています。

さて、そのへんをどういうふうに私たちが評価しようかと悩んでいるわけです。学生たちに「あなた方は、どのように、どこを見てもらいたいですか？」と、ちょっと聞いてみたいと思います。どうですか？

西川
今回のプロジェクト科目で「評価って何なんだろう？」ということを思いました。「何のために評価するのか？」ということについて。「評価は何をためにするのか？」。私の考えでは「評価は次のステップにいくための足場づくりである」と思います。プロジェクト科目の目的も意識せずにきましたが、プロジェクト科目の設計者が、これからの学生の未来、これからの社会を、どういうふうに描きたいのか。これからどういう社会をつくっていきたいのかが目標にあって、そのためのプロジェクト科目であり、学生にとっては社会に出てからの生きていくための力を、少しでもこの教育を通して見つけたいと思っているわけですから、科目設

計者の方が、学生の未来、社会の未来をどのようにおいていたのか。それに基づいて評価の基盤を固めていくと思うので、何が求められているのか、社会に出て働いたことがないので、どういう力が求められているか、学生にとってはまだわからないですが、そういうことを、もっと示していただければ、私たちも評価を真摯に受け止めていけると思います。

山田

僕が設計者です。今の言葉は本質をついていると同時に、そのあたりのことについて説明不足になっていたということが、よくわかりました。それはおそらく私どもの一つの目指しているものを、もう少し周知していかないといけないということです。最終的には我々は基本的に自分自身の人生設計が自力できちっとできるような人物になってもらいたいと考えています。2006年の科目設置の時、この科目のプロモーションビデオをつくりました。その時点での私の結びの最後の一言は、新島襄の言葉も引きながら、最終的には「自分の人生のキャリアを自力で、きちっとデザインできるような人物になってもらいたい」でした。そこに至るまでの間にどんなことが必要なのかを考えていく。そういう考え方ですが、考え方は考え方として、それが科目担当者に、どれくらい共有されているか。科目担当者の中で、どれだけ共有された部分を学生に伝えることができるか。そこが重要なポイントになっているということだと思います。それを、ものの見事に「評価は何のために？」という発話で叶えられた。これでかなりポイントが上がったのではないかと思います。私たちは基本的に社会に問いかける力を身につけないと、それはできないと考えていますから、そのことが重要だなと思っています。だとすれば「何のために評価をするんですか？」という問いに対して、僕だけではなく、いかがですか？

飯田

我々の学部の中には、大学において学生を評価することは全く意味をなさないのではないか、と思う一派があります。私もそのひとりです。大学生を評価することは意味がないのではないか。つまり大学生の評価は自分で申告してもらえればいいわけで、我々がつけるものではないと思っています。それは極端な話ですが、学生は何のために評価されたいのかというのは不思議なことですよね。いい点をもらったら企業はとってくれるのか、いい点をもらったら誰かが褒めてくれるのか。自分が何点か、大体わかっているわけじゃないですか。プロジェクトに参加した時に、自分はそれにどれだけ力を入れたのか。どれだけ力を抜いたのか、何を上げたのか、本人がわかっているべきだし、本人がわかることだと思います。それを精緻な評価をすることは、だまされあいをしないようにする。何か、うまく隠したものを、こちらが見抜く力とか、そういうことでは、全くないはずで、何のためにするか。大きな問題だと思いますが、教員は学生を評価することに懐疑的ですが、学生は自分の評価を持たないといけないことは間違いないと思います。それが難しいのであれば、手助けをしないといけない。何のためにするかというと、学生の自己実現を助けるために評価をする。大学は何のために行くか。自己実現をするためです。自分を理解するという目標のために行くわけだから、それに対して、どれだけ自分が到達したかを確認して、フィードバックして、自分自身で納得する。「次のステップに行くために評価をする」といわれたのは、すばらしい解答だと思います。まさにその通りだと思って、評価するということは、次のステップに行くためであって、本当は学生自身がやればいいんだなと思います。

山田　溝上先生、いかがですか？

溝上

FDでも評価がなかったら、こんなにしんどいものにはなっていません。自分たちで改善していくというのは聞こえはいいですが、それでは押さえるべきポイントを外すこともしばしば出てきます。何でも授業改善をすればいいのではないのです。もちろん、外から枠組みを示されるのは鬱陶しいことです。しかし、時代や世の中の、あるいは国際的な中で求められている課題があって、そこに併せた改善をしていくことが多かれ少なかれ求められています。だから、評価がうるさく言われるのです。私も鬱陶しいと思っていますが、外せないとも思っているわけです。質保証の話がありますから、飯田先生のようなリーダー的な方が「質保証はいらない」と言ってはいけないと思います。お気持ちはよくわかりますが。

先程の学生のコメントは考えさせられました。「何を評価されているのか？」「何のために？」という疑問が出てくるような授業、プロジェクトに取り組んできたということですね。ということは何がプロジェクトに取り組んで見いだされるべきか、参加する学生がわかっていなかったということですね。プロジェクト学習を授業や大学教育の一環としてやるのであれば、やはりどこに向かうべきだったかというベクトルが、抽象的でもいいので、示されなければならなかったと思います。どこに向かうべきか、どこに向かったのか、という自覚が、担当者や学生にあるべきだったと思います。そうでないと、学生がどのような点で成長したのかを見定めていくことができません。学生にこれを見定めろ、というのは間違えていると思います。科目担当者がもう少し見定め、目標とするところを明示化、共有する必要があったのではないかと思います。

山田

おっしゃっている趣旨は大変よくわかります。その通りだと思います。ただその時に目標の設定の仕方が、それぞれ違うのではないでしょうか。専門科目の中の必修でやっている場合と、今日、報告した学生たちは教養教育、一般科目の中で履修していますから、専門知識を、できるだけ吸い上げていくための方法の授業ではなく、自分たちでゼロベースでスタートして考えて、課題設定して、スケジュールも組んで、最後までやっていく中で、そういうプロセスを体験する中で、どういうふうに対応すればいいかを考える、そういうことが求められているということがあって、そこの部分で、少しニュアンスが違う部分が含まれているということは、一つはあるかなと思います。

今の質問に対して学生に返してみたいと思うのは、科目担当の先生が考えていること、テーマ、目標は、皆さんの中では、どんなふうに理解されていたのかということを、今度はもう一度、問いかけてみたいと思います。気楽にしゃべってください。担当者、教員がいるとわかりやすいのですが、遠慮しちゃいますよね。ですので違う形にしてみました。登壇している先生方は直接は指導していない立場ですから、まあ、ええかという感じで気楽にしゃべれるのではないかという趣旨です。次に返しましょう。

川崎
先生が、どういう狙いで、この授業をして、学生がどう変わっていくかということを、先生の中で、あるかはわかりませんが、授業として秋学期に全員、発表することがあって、それに向けて準備していくことがあり、結構、学生がやりたいように任されていたので、学生たちが悩んだり、学んだりすることが狙いではないかなと思いました。

山田
自分たちでつくったということですね。担当者の先生は「こんなのがいいな」といわれて「じゃ、自分たちができるのはこれや」と自分たちでつくったということでしょうか？

川崎　それを発表という形で感じました。

山田
目標設定値を先生方から出すのではなく「こんなテーマでやってね」と提示され、それに対して皆さんが「これが目標だ」と感じた。それに対して先生が理解をして互いに共有しあってスタートしたということでいいですか？

西川
私の田中さんの意見は違いますが、おっしゃったことに対する答えは、ベクトルの成長の方向性がわからない、それはまずいのではないかという話がありましたが、ベクトルがオープンだからこそ、可能性は未知数、オープンだから危なっかしくもある。そういう危なっかしさを伴うものが、同志社大学でのプロジェクト科目だったのではないかと思います。申し訳ないですけど（笑い）。

山田　申し訳なくないですよ。狙い通りです。はい（笑い）。

西川
私たちは、「京都の織物文化活性化」に向けて自分たちに何ができるか、科目担当者の先生がなぜこのような難題を私たちに与えたのか、ということについて悩み、ほんとに議論ばかりしていると、昨年の10月になったんです。このままだと何もできないまま1年が終わるということで、悶々としていた時に、山田先生と話をする機会があって、何かヒントをもらえないかなと思い先生に相談しました。先生は「できなかったらできなかったで、それまでだ。アウトプットを何一つできずに終わってしまう、それも一つの終わり方だ」とおっしゃいました。シビアだし、厳しいなと思いました。私たちが行動を起こさない限り、何もできずに終わっていく。そういう環境に投げだされてはじめて、主体的に、本気で今後の方向性を見つけていこうと思いました。
そして、私たちは、科目担当者の先生と話しあいをする機会を設けました。この時は、先生に対して今まで思っていた疑問をぶつけて、とことん話しあいましたが、その日をきっかけに担当者の先生と学生が一緒に方向性を描けるようになりました。そういうベクトルとか成長の方向性はわからないし、そこには何も出来ずに終わるという危険性もあるけれど、担当者と学生が一緒になって方向性を創造していく、それがプトジェクト科目の良さだと思うんです。そして、その創造の場を支えてくれるのが教務課の方々だと思います。

山田
多分、「腹を割って話したら、ええんちゃう？」ということだと思います。「遠慮しあっているから、そういうことになるんじゃないの？」と。腹を割って話をするだけ、「あとはしゃあないやん」ということですね。

田中
意見は違うように思いませんが。活性化という難しい問いに対して、きちんとした答えを出せてないだろうなということは、1年間思っていました。ほっておいたら活性化について考えて、終わってしまうような中で、活性化に対して何が自分たちで徹底してやりたいかという目標を向かって達成できたかということではないかと思います。「錦」という世界は伝統があって普段触れられない世界ですが、そういう世界を通して活性化を考えることで、何か自分にフィードバックしてほしいなと、科目担当者の先生は、考えておられたのだと思います。

山田
感動的な話ですよね。なぜかというと、評価というのは、成績評価なんですけど、評価という言葉自体、持っている膨らみがあるんですね。そこをどれくらいの幅で見るかによって変わってきて、彼らの言葉から出てきたのは、こういう人からフィードバックをもらえるような、そのフィードバックが自分たちが次に行くための評価なんだという、そういう受け止め方をしていることだと思います。そういう評価が積み重なってくることで、自分が何をしたいかがわからなかったけど、その期間があって、どうしようかと考えていかなければならないという状況が、自分たちを成長させてくれる過程だ、と考えているのだろうなと思います。それがいわば、自分たちで課題設定して、解決するためにやりなさいとなった時、担当者から丸投げになってしまうと、学生はしんどいんですね。実際にはそうはなってなくて、一定のテーマを与えて、何をどこまで考えられるか。実際に現場に案内して、そこで触れさせて帰ってきて、そこでまた議論して、議論の中からさらに問題を炙りだしていくことを繰り返すことの重要性に、10月くらいに、やっと気づいていく。そのあたりで、ピタッと一つになってくる。それまでは現場に行って、そこで学んだということで止まっているのが、多分、そこでつながった。そのための条件が、腹を割って話すということだったと思います。それが伝わったら、そこからほんとに学びたいという、学びが始まるということだと思います。絵本でも同じようなことがありましたか？金丸君が口を開いた。絵本のプロジェクトで、錦織で体験したようなこと、実際にフィードバックをもらう、その中のプロセスは、あなたの中でどうでしたか？

金丸
そうですね。現場の人と会うというのは、主に絵本カフェに行ったりして、絵本をどのようにすすめていくかを見にいって。それを知った上で、イベントをどうすれば、絵本を、どのようにつくれるかということのヒントにはなりました。

山田
金丸君がいわれたことも大事で、インプットの問題がありまして、どうインプットするか、PBLをやっていても、プロジェクトを動かしていても、いかにインプットさせるかというふうに考えると、それは100％無理で、むしろインプットしたという気持ちにさせないといけない。やりたいと思う気持ちが核にないと主体的な学びは生まれないと思います。そこで初めて調べたり、現場での調査が、自分たちのプロジェクトと結びついて血肉化するのだと思います。絵本の場合、絵本の文化的価値は、これ

やということを話しあったと聞きました。錦織の場合も同じだと思いますが、これについては絶対、私は学んだと思っている、核になる部分は見抜いているわけです。それに即して、自分たちが何をいかに実現できるかに向けてやっていきたいと行動している。そうした学びの躍動感をどう評価できるか、ということになるわけですね。

土肥先生のところで出ていましたが、プロジェクトにかけた時間、この時間を点数に換算して、これだけの時間やったら、たいしたものだと、極端にいうと。そんな判断は、なさっていないと思いますが、時間の重要性を少し、土肥先生からお話いただけますか。

土肥
「基礎プロジェクト」、「開発型プロジェクト」、「年次縦断プロジェクト」ということですが、どう評価して良いかというのは難しいものがあります。中でも「年次縦断プロジェクト」は、先輩がいて、後輩がいて、というスタイルがあります。そこを狙って、その間で何が、どう伝わっているのか、評価を明文化することは難しいものがありました。「だったら活動時間でカウントしよう」と、担当者の中で決めております。受ける側にすると、活動時間から自分が何点になるのか分かりますので、予めスケジュールを立てて、その時間を確保しようとします。狙いとしては、異なる年次が全体でずっと活動していくことです。先輩になって後輩を指導しなければいけないことも起こってきます。そういうことを勘案すると、時間をカウントしていくのが適切だろうというシステムになったと聞いています。

山田　何時間くらいやると、ええ感じですかね？

土肥
そうですね、多くの方が80点以上を目指し、SやA評価になることを狙っています。「年次縦断プロジェクト」では、総時間数を逆算できるわけです。1日の活動時間の制限を設け、それを分散しながら活動をするようなシステムになっております。

山田
なぜそれを聞いたかといいますと、インプット、アトプットの問題も同じですが、この科目は授業時間内の学習と授業外学習の時間があるわけです。学生はどちらで成長するのか？両方だというのが優等生的な答えですね。でも実態としては授業外学習の時間に一番成長するのだろうと思います。自分たちが集まってミーティングして、議論して、現場に出掛けて、いろいろやって戻ってきて、また元へ戻していきますから、授業外学習の方が、はるかに深まり度合いは大きいわけです。それをどういう形で見ることができるかは大事なことだと思います。東京電機大学がユニークだと思うのは、2時間までと決めて、ラスト駆け込みで頑張る、何十時間というのは認めないというのはユニークだと思います。どれくらい時間をかけたら、すごいということもわかると面白いかなと思ったりする。参考までに飯田先生のところは、やっている感じとしては、優秀なのは大体、こ

れくらい時間をかけているのかな、ほどほどのところは、これくらいかな、と感じているところで、現状ではどうでしょうか？

飯田
うちの科目の場合は通年で4単位です。文部科学省的な計算は抜きにして、よくやる学生は今年のプロジェクトでは、ある地域の活性化をやった学生たちでした。かなり離れている現場ですが、チームは年間12回行きました。一月一回行って合宿するような感じです。皆でまとめるにしても、週2、3回、彼らは集まってやる。それ以外に本人たちが課外として現場に行く。あわせると、よくやるところでは週4、5コマくらいは使うのが一般的だと思います。土曜日を入れたりすると。まとめて夏休みに集中してやるところとか、時間的には、かなりかけているところは、かけていると思います。

山田　溝上先生も、そのへんはお考えになっていると思いますが。

溝上
そういう組織のデータをとって、こういう場で出していくとさらにいいなと思います。学習時間は単位制度の問題とあわせて、PBLにかかわってない人たち、大学関係者もあわせて、大きな共通関心事ですので。

山田
PBL の実践事例とか見直しの中でも、授業外学習時間、授業時間をあわせてやるべきだろうという方向が出ているわけです。私もそういうことをいろんなところで試したりしていますが、その試し方の基本は自己申告制です。自己申告は細かくメールで上げていきますが、まあまあいけるというのが1年間で最低100時間くらいです。ああ、熱心に取り組んだなといえるのは300時間くらい。そこから上にいくと一定水準を越えていくというのが私の実感です。普段、学生は意識しないことですから、意識していないことに対して問うのは無理だということで、どうすればいいかです。ひとつはふだんの活動時間を意識してもらうことです。意識してやりますと、文字通り、学生の活動時間と活動内容をあわせてもらって、どれくらいの時間をやったのかを集計と統計をとります。大体の指標は出てくる。この評価の基準は重要なポイントだと思っています。
一つの授業という括りを、授業のあり方をどう考えるか。形態によって異なりますので、異なる形態に応じて行う必要があるわけで、講義型の場合の予習復習と授業外学習は違ってきます。講義型をもって×2くらいでやりましょうというのと、全然違っているわけです。自分でやらないと、次に進めないという状況になります。やって、もう一回見直して前に行かないといけない。行ったり来たりの時間になってしまうので、その往復の時間はかかりますが、往復の時間で学生は成長していく。それは個人ですけど、同時に彼らはチームでやっているということが、もう一つあるわけです。個人のポートフォリオとチームのポートフォリオが併用されないと、うまくいかない。それを教育支援ツール、評価ツールを使って可視化してもらう方向へ持っていくと、ずいぶん学生は何をやっているかが見えてくると思います。ある種のコミュニティのように考えて、そのコミュニティを、どういうふうに育んでいくかを、学生たちも体験している。その中で信頼関係をつくっていって、そのうち担当者との信頼関係もできていき、そこから自分たちの学びの意欲を引き出していくのが、PBLの魅力だし、それを発揮できるところにいかないといけないし、同時に、そういう仕掛けを入れながら、彼らの学習に、より近づいていくということだと思います。評価が問題であるということは結局、私たちが彼らの活動や学びの実態へ一歩でも近づいていくことで、評価者も近づいて、学生も評価者に近づいて、一

緒につくりあげることができないと、多分、評価は実体化しないだろうと思います。そのためには担当者も評価力を磨かないとだめですし、学生も評価力を磨かないといけない。

私は一つ思うのは、PBLが通常の授業と決定的に違うのは何かと問われたら、評価が教育プログラムの中に入っていることが挙げられると思います。学生自身が常に評価活動を日々しないと前に進めない。タスクの問題が出ましたが、役割分担をしようと思ったら、実は彼らは評価しあっています。「あの子にこれを任そう、あの子に、これ、やってもらおう」「なんで？」と聞いていった時、「なんで？」という問いを自分自身に向けて、それを客観視できたとすれば、それは一番理想です。そこにいくまでに「あの子にやってもらおう」と決めて合意形成ができていくとすれば、それは多分、その学生の「評価力」が発揮されたのだと思います。その意味ではプロジェクトをマネジメントする、動かしてくためには、そういう評価力なしに、できるものではないということです。

「研究力」と「教育力」と「社会力」の3つを、かつて挙げていましたが、次のGPで挙げた第四の軸が学生の「評価力」。この4つの言葉で学生の潜在能力を引き出さなければならないと、学生は評価される客体であるだけではなく、評価する主体でもあるんだ、と考えるべきで、その評価がドッキングして、幸せな結果になれば、いい学びに導けるプロジェクトではないかという確信を持って、思い込みを持って、信じてやっているわけです。それは客観的に計ることができるか。そこでの評価は、生きているプロジェクトをいかにとらえることができるのか、そこに参加する学生の姿がしっかり見えてくるようなものでなければならないと思います。

抽象的な言い方ですが、一緒に動きながらしか、評価できないということがあるのではないかと思っています。JRの新快速と各停が走っていて、どこかの時点で追い抜いていく。両方とも、ものすごいスピードで走っているんですが、並びかけると、向こうの車両の様子が見えるんです。対向車線を走っていたり、あまりに高速でビューンといくと見えませんが、同じような速度で一緒にビューンといくと見えてきますが、また相手の速度が上がっていくと離れていく。むしろ、追い抜けばそこから見える部分を見て、追い越されればそこから見える部分を見て、そういうことを繰り返す。こういう行動型の授業に対して、全力で走りながら評価の眼差しを鍛えていくことが必要であり、きっといっしょに走って行けたら、多分、いい評価の眼差しを持つことができるのではないかと思っています。

最後に学生の振り返りで終えさせていただきたいと思います。さて今日、彼らは一体何を学んだのでしょう。シメの言葉を。今日はこれだけの成果を上がったとか。

西川

ありがとうございました。このような機会を設けていただいた教務課の方々に感謝します。今日、来てくださった科目担当者の先生方にも感謝申し上げます。ありがとうございました。

山田　ご挨拶みたいな。これを学んだということをいっていただいて。

田中

アウトプットに対する評価を、あまり皆さん評価しないというお話もありましたが、そのプロセスがアウトプットにつながっていくのではないかと、聞いていて思っていました。

山田

いいシメですな。インプットとアウトプットは一体のもので、プロセスから、おのずと結果は出てくるものです。なおかつ、その時に担当者が求める水準が、基本的にはあります。この水準でなけれ

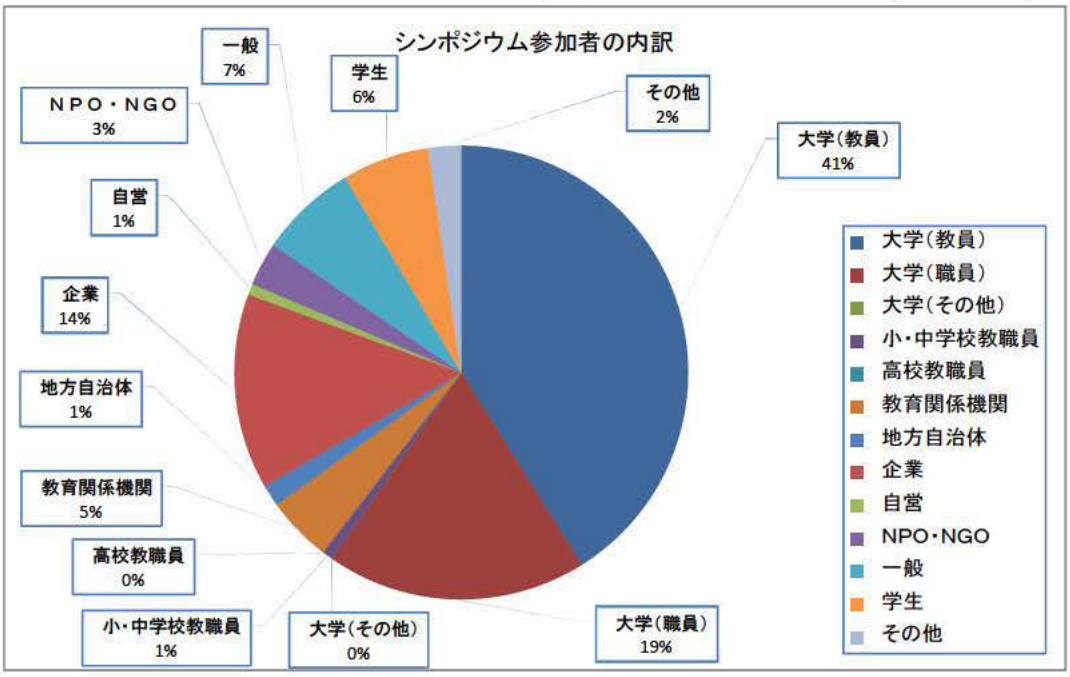
ばならないという水準に近づいていかなければならないと。しかしながら逆転してはいけない。アウトプットの成果を出すために、やりなさいということではなく、アウトプットを目指しながら、そこをしっかりと見ていく。学生たちは結果を見て達成感を感じる。そこを私たちが生半可に、がちゃがちゃいうても、学生は喜ばないということだけは、はっきりいえることだろうと思います。これで本日のパネルディスカッションを終了させていただきたいと思います。皆さん、本当にありがとうございました。先生方、長年取り組んでこられた中で一番の今の問題点をわかりやすく、明快にお話をしていただきまして、その部分でお互いに理解を深めあえたと思います。溝上先生には面白い爆弾を仕掛けていただきまして、おかげでいろんな学びの幅ができたかなと思います。プロジェクト報告をしてくだった学生の皆さん、ご苦労様でした。ありがとうございました。これにて今回のシンポジウムを終了させいただきます。

司会　以上をもちましてシンポジウムを終了とさせていただきます。ありがとうございました。

「第3弾　学びの原点　プロジェクト型教育の挑戦！-誰が何をいかに評価するのか？-」
ー　アンケート結果について　ー

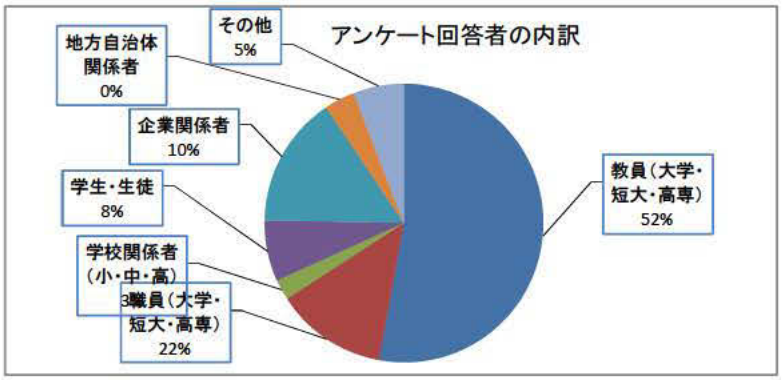
●シンポジウム参加者の内訳

所属	人数
大学（教員）	53
大学（職員）	24
大学（その他）	0
小・中学校教職員	1
高校教職員	0
教育関係機関	6
地方自治体	2
企業	18
自営	1
NPO・NGO	4
一般	9
学生	8
その他	3
合計	129



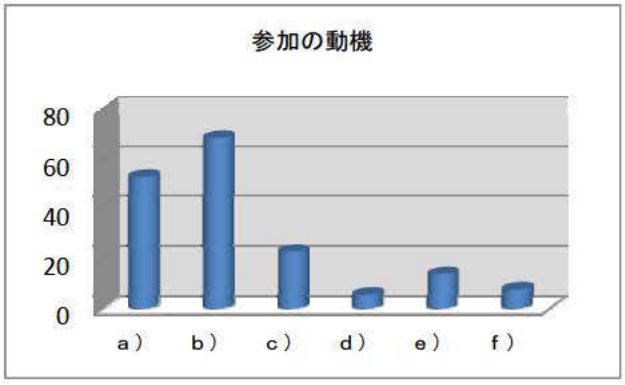
●アンケート回答者の内訳　※参加者中、アンケートにご回答頂いたのは、約 65%でした。

所属	人数
教員（大学・短大・高専）	45
職員（大学・短大・高専）	11
学校関係者（小・中・高）	2
学生・生徒	6
企業関係者	13
地方自治体関係者	3
その他	5
合計	85



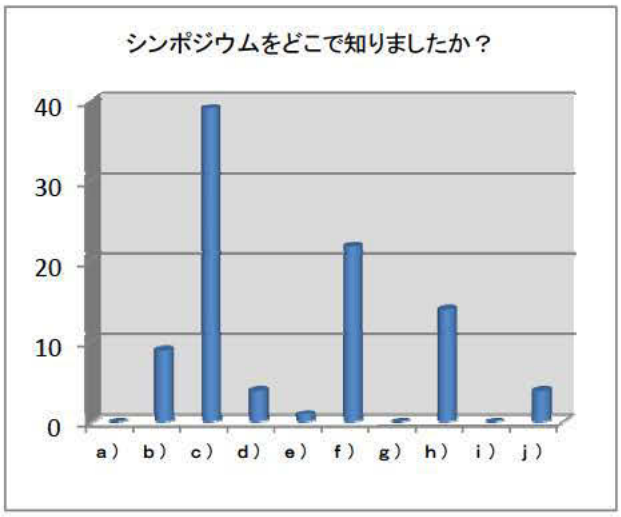
●参加の動機（複数回答可）

参加の動機	人数
a） テーマに興味があった	53
b） PBLに興味があった	69
c） 人材育成に興味があった	23
d） 関係者から進められた	6
e） 大学生の活動に興味があった	14
f） その他	8



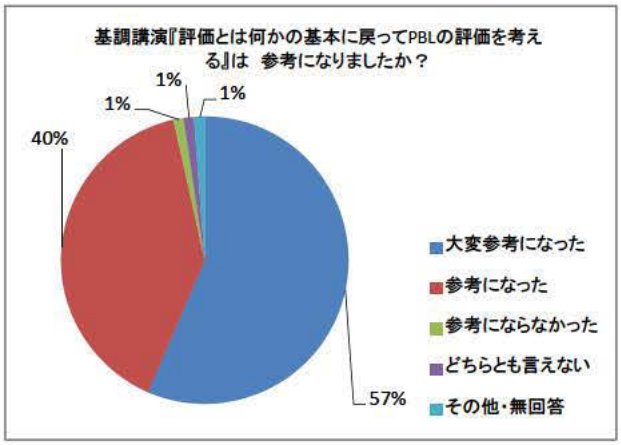
●シンポジウムをどこで知りましたか？（複数回答可）

シンポジウムをどこで知りましたか？	人数
a） 新聞広告	0
b） 同志社大学のホームページ	9
c） 案内パンフレット	39
d） 学内のポスター	4
e） 学外のポスター	1
f） メーリングリスト	22
g） 文部科学省ホームページ	0
h） 関係者に勧められて	14
i） 地下鉄今出川駅構内の展示	0
j） その他	4



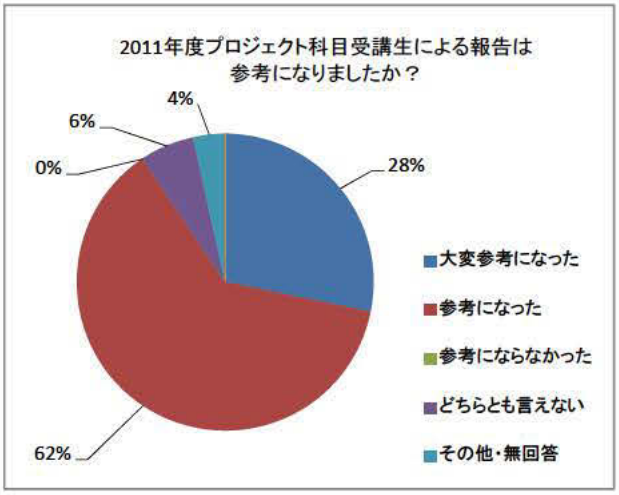
●基調講演『評価とは何かの基本に戻ってPBLの評価を考える』は、参考になりましたか？

基調講演『評価とは何かの基本に戻ってPBLの評価を考える』は、参考になりましたか？	人数
a） 大変参考になった	48
b） 参考になった	34
c） 参考にならなかった	1
d） どちらとも言えない	1
e） その他・無回答	1



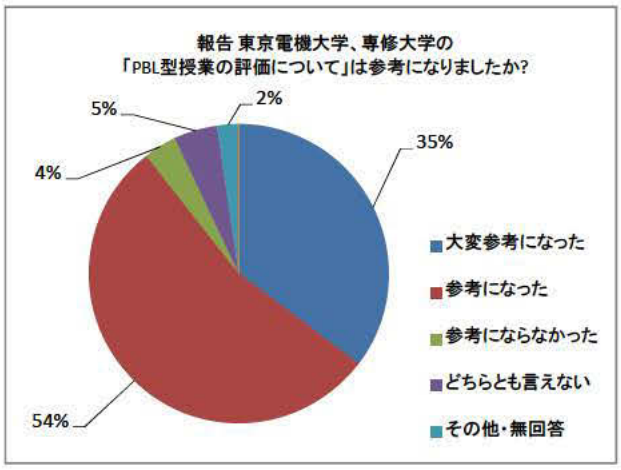
●発表 2011年度プロジェクト科目受講生による報告は、参考になりましたか？

発表 2011年度プロジェクト科目受講生による報告は、参考になりましたか？	人数
a） 大変参考になった	24
b） 参考になった	53
c） 参考にならなかった	0
d） どちらとも言えない	5
e） その他・無回答	3



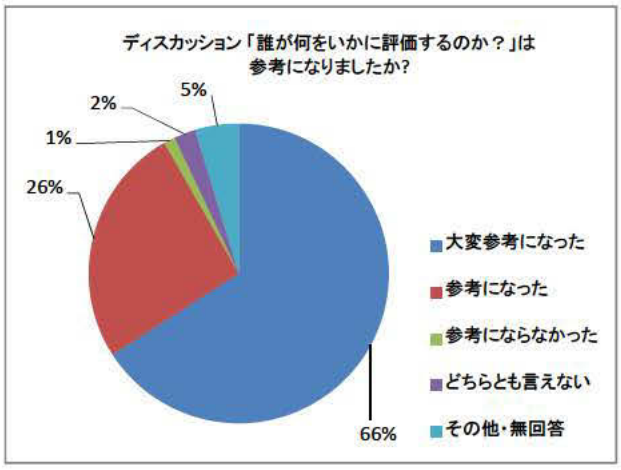
●報告「東京電機大学情報環境学部におけるPBL型授業の評価について」及び
「専修大学ネットワーク情報学部におけるPBL型授業の評価について」は、参考になりましたか？

報告 東京電機大学、専修大学の「PBL型授業の評価について」は、参考になりましたか？	人数
a） 大変参考になった	30
b） 参考になった	46
c） 参考にならなかった	3
d） どちらとも言えない	4
e） その他・無回答	2



●ディスカッション「誰が何をいかに評価するのか？」は、参考になりましたか？

ディスカッション「誰が何をいかに評価するのか？」は、参考になりましたか？	人数
a） 大変参考になった	56
b） 参考になった	22
c） 参考にならなかった	1
d） どちらとも言えない	2
e） その他・無回答	4



第３弾 学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦！－誰が何をいかに評価するのか？－
アンケート結果

■基調講演

1.『評価とは何かの基本に戻って PBL の評価を考える』は、参考になりましたか？

＜教員＞

- 高等教育論の紹介、参考になる。ルーブリックの導入についてよく理解できた
- 現在キャリア形成関連科目の内 3 年次配置科目を担当しており、次年度に向け大幅なカリキュラム見直しを希望しているところで、自分の考えを裏付ける理論的枠組みを明確に整理することができた
- 通常とは異なる PBL の科目としての捉え方のポイント視点がわかった
- PBL は複数の教員で進めるため評価を逃げがちであるが、やはりそれでも評価の枠組みに取り組むことの大切さを認識することができた
- 一般教育の評価論から出ることができていない
- 複数の大学の評価の取組みを知ることができ、自校の取組みを客観的にながめる事ができた。評価の 1 つのヒントを得たような気がする
- 基調講演は一般論ではあったが全体を見通す視点となり良かった。ただ、最初の視点が時々置き去りにされていたのは残念だった（これは進め方の問題だが）
- 評価項目を明確化することの重要性を認識した
- 評価という考え方を、学習プロセスに入れる事によって、学生が評価に参加し得た。プロジェクト型学習はコミュニケーション抜きには不可能である以上、そこに評価は常にその学習の中でなされている、との山田先生の言葉に感銘した
- 評価の基礎についてのわかりやすい解説だった。フレームワークが良くわかった
- PBL の成果は想定外のものが多いので、一般の業務よりもこの部分が多いと考える。JABEE（日本技術者教育認定機構）では、評価方法の開示が求められている
- 目標設定の重要性を認識できた
- 評価の重要性そのものと、その評価のやり方について具体的に聞くことができて非常に参考になった。評価の一般的な考え方をサーベイしていただいた
- PBL 推進のベースとなる目標設定、評価基準の検討・準備、教育としてあるべき姿について認識を深めることができた

＜職員＞

- どうすれば学生の成長を可視化できるのか、日々悩んでいる。コンセプトマップという具体的なツールが知れたので、さっそく実践していく。授業設計にとても役立つ話だった
- 評価基準や観点の例をわかりやすくご提示くださった

＜学校関係者＞

- PBL の評価について大変わかりやすく説明していただいた
- 実践例を中心にわかりやすく解説、特に現場の状況を踏まえて、最近の大学の動きも良くわかった

＜学生＞

- 現在の教育・評価について概要を知ることができた。また、ルーブリックは自分を評価することにも使えると思った
- ルーブリックの採用は具体的で良い
- 現実と乖離する部分はあるように思ったが、参考になった
- 型をはめてやるのか、完全に自由にやるのか、その間をどうとるのか、サポートとして何があるのかという観点があることに気付けた

＜企業関係者＞

- 「評価」という基本的だが最も重要なテーマが注視されていない点が浮き彫りになった
- 「評価」をめぐる具体的なお話をうかがえたので勉強になった
- 評価の考え方について、最初に目標がないと授業の評価にならない、ということを初めて知った。評価における難しさの構造理解に繋がった
- 4 つの観点に区切ってポイントごとに示していただいたので、先生の話は「軸」として大変参考になった。コンセプトマップの活用がイメージできた
- 打たれ強くなった…個人としての成長にはなるが、授業として考えた場合、必ずしも評価

の対象にならない事もあるという話がとても刺激的だった
・　見える化の手法、コンセプトマップは是非プロジェクト科目で実践したいと思った

＜地方公共団体関係者＞
・　評価は永遠の課題で、大変面白かった

＜その他＞
・　評価という観点から、ストレートにお話が聞けてわかりやすかった
・　評価の基本を再認識できた

2.内容についてのご意見やご感想

＜教員＞
・　「しゃべるのが得意になった」で満足する、悦に入る教育者にならないよう、PBL の教育効果測定を実践しようと思う。学生からの意見が良かった
・　大学の教学スタッフ（教員以外）がそもそも「教育」「学習」を理解できないままに表面的な「評価」（殆どは主観、感想）をしていることを自覚しないまま、教員の教育活動に干渉してくることに危険を感じている。専門家の近場でもっと広く意見発信して下さることを願っている
・　具体的なプロジェクト科目のひとつを取り上げ、例として調査･分析・評価方法を提案してみてはどうか
・　PBL を大学だけでなく小学生から実践すると、日本は変わると思う
・　評価は教育界以外では 30～40 年前から様々な手法があるので、それらを取り入れることも大切では、と考える
・　溝上先生の基調講演をもう少し長く聞きたかった。講演時間が短い
・　PBL における知識構造の深化をデザインすることの重要性を再認識することができた

＜職員＞
・　評価の難しさと必要性を意識することができた
・　当たり前のことを話していただいたと思うが、カリキュラムにおける PBL の位置づけに関する話は勉強になった。ただ、実現は難しいと思った

＜学校関係者＞
・　時間が少し足りなかったと思う

＜学生＞
・　類似した方法が企業の社員評価にもあるが、感情が入りやすいのが現実であると思った（社会人経験から）

＜企業関係者＞
・　評価に関して考え方や方針が遅れていると感じた。今後の進展に期待する
・　世間で言う PBL に「評価」の観点が抜けていると実感した
・　学生が相互に評価し合うことについても話を聞けたら、と思った

＜その他＞
・　一貫して、評価まで行なった事例があるとさらに良かった
・　自分から目標を設定して、方向性を決めて行動していくことが大切だ
・

■発表

1.2011 年度プロジェクト科目受講生による発表は、参考になりましたか？

＜教員＞
・　学生がよく準備して発表している事には感心するが、イベント性の強い科目設定であるように受けとめた
・　具体的な取組み内容や自己評価等よくわかった
・　錦のプロジェクト、素晴らしかった。堂々としており良かった。実践内容も興味深かった
・　興味を持って調べて取り組んだことがとても良くわかったが、アカデミックな意味で、問題をどこまで深め、エビデンスに基づいて設定できたのかがプレゼンの中で見られなかったのが残念だった
・　文系学生のプレゼンスキルが高い。心が入ったプレゼン。学生の視点がわかった

・　常にそこに私には見えなかった世界がある。これは彼らが古い共有概念を持たない新しい人々だからだと思う。それこそがこの社会を活性化してゆく装置だと思う
・　何を学んだのか、テーマが絞れていた
・　事前の要因分析について聞きたかった。その要因についてどこまで解決できたのか
・　教員による説明があると、さらに理解できたと思う
・　プロジェクト型授業（プログラム）の重要性がよくわかる具体例、成果を見せてもらった
・　プロジェクトの１年間の活動プロセスを知ることができた

＜職員＞

・　学生が頑張っているのが良くわかった。成果発表なので仕方ないのだろうが、結論・結果に至る過程を知りたいと思った
・　プロジェクトの質が良くわかる。今日は「評価」がテーマなので、事業者、関係者がどう評価したのかを聞きたかった
・　プロジェクトの内容を具体的にうかがうことができた

＜学校関係者＞

・　どちらのプロジェクトも学生がわかりやすく年間の活動の概要を報告してくれた
・　プレゼンのまとめ、報告は非常に良かった

＜学生＞

・　学外の人々の協力を得られることの大切、苦労について、失敗談も時間があれば披露できたら良かった

＜企業関係者＞

・　絵本、錦織物とも、学生が何を学んだかが明確になった
・　錦プロジェクトの報告で、反省としてさらに高いレベルを考えていることが素晴らしいと思った。プロジェクト内容の壮大さに驚いた
・　かなりレベルの高い取組みだった。社会人の私でも新鮮な気付きを多く得られた

＜地方公共団体関係者＞

・　2012 年度の PBL の推進に参考になった

＜その他＞

・　PBL の取組みが具体的にわかった

2.内容についてのご意見やご感想

＜教員＞

・　通年科目で途中モチベーションが下ることは当然あると思うが、それをどうリカバリーしたのかも触れてもらえると「用意しすぎ」のイメージが軽減されるように思った
・　見やすい、わかりやすいプレゼンだった。プロジェクトリテラシーと絡めて最後をまとめると、さらに良かった
・　発表については、活動状況や想いなどが伝わる良いものだったと思う。ただし、失敗やチーム内での葛藤についてなど、もっと生々しいことも聞きたかった
・　学生が一生懸命やっていて好感が持てたが、教員がどういう指導をしたのかが見えない点が残念。指導教員も 1～2 分コメントしてほしい
・　プロジェクトを１年間で終了するのではなく、次期のグループに引き継いで指導的な立場から参加するようにデザインできるとよいと思う
　・　絵本：イベントを実施することが主になったようで、メンバーが絵本に出会
　・　った状況や、創作絵本へのことがあればと思った
　錦：1 年の中ではテーマが大きすぎたようで、若い感性からの提案がひとつであれば良かった。分析、感想は良い

＜職員＞

・　本日のテーマである、評価（者）の観点から、プロジェクトの話を聞けたらと思った
・　錦のプロジェクトは、社会的文化的意味のある内容と感じる。きちんと振り返り、次につなげるべきところまで考え抜いているところも素晴らしい。今期で終わらず、継続事業として進めてもらいたいと心から感じた。応援している

＜学校関係者＞

・　テーマに対する取組みのプロセスと最終目標がいまいち分かりにくかった。問題解決に対

する議論や突っ込みが少し不足しているように感じた。何か最終的に、PBL としてのアクションやもの作りを条件とされている様にも感じた。大学ではもう少し問題の本質に迫り、クリエイティブな解決策（アイデア）や現代的な問題点を掘り起こしてほしかった。答えはない、から出発すべき！！（パターン化が少し気になる）

・ チームの役割分担や経過、反省なども報告がほしかった（チーム力等）

＜学生＞

・ 秋学期成果報告会よりプレゼンテーションが洗練されていた。学生にとっても非常に貴重な機会であったと思う
・ 「絵本」のプロジェクト参加者の司書（図書館）取得者の有無、「錦」のプロジェクトの反省点についての今後のフォローはどうなるのか、気になる
・ なぜそれに取り組んだのか、やる前には何の成果を意図していたのかをもう少しはじめに聞きたかった
・ 科目担当者の意見を聞きたかった

＜その他＞

・ 錦織物の方々の現状は見えてきたが、本人の意見や織物文化を伝える、そこに住む住民の実際の手段を踏み込んで知りたい
・ プロジェクトの実践、指導に関する評価も聞けると良かった

■報告

1.報告「東京電機大学情報環境学部における PBL 型授業の評価について」及び「専修大学ネットワーク情報学部における PBL 型授業の評価について」は、参考になりましたか？

＜教員＞

・ 各大学の具体的な取組み内容や方法の概要が良くわかった
・ まさに本日のテーマに合致した有意義な内容だった
・ 様々な型があって、課題があることが参考になった
・ 学部単位での実施に多くの困難があることがわかった
・ 教員を評価手法で束ねる困難さを改めて認識した
・ 非常に良くやっている

東京電機大学…卒研・開発型プロジェクトの従事時間について不明確であった。
卒研をやらずに卒業していく学生がいることがわかった

専修大学…レジュメの配布をしてほしかった。
アウトプットの質を評価基準としていない（不採用としている）点には驚いた。
卒研の有無や PBL と卒研の関係性が不明

・ まず、私の勤務大学にはほぼ全くない形なので、非常に興味深かった。私の専門（日本語教育）においては従来から取り組んでいることなので異分野の PBL を知る良い機会になった
・ 両大学（学部）とも PBL を重視し、しかもこれを地道に実施・実践しておられることに、大変刺激を受け参考になったし、且つ、そのことに敬意を表します
・ 組織としてのプログラム運営の工夫や苦労が参考になった
・ どの大学も共通の悩み（課題）を捉えながらも実践していっていることがよく理解できた
・ 必修科目として取り入れている PBL に対する様々な工夫が大変勉強になった
・ 選択科目か必修科目かによって評価の仕方も異なるのでしょうが、評価の方法の幅は専修大学のほうにあるように思った
・ プロジェクト科目の具体的な組織化の事例も知ることができた

＜職員＞

・ それぞれの大学の取組みや創意工夫、苦労をうかがうことができた
・ どこの大学も気付いているが、評価基準を明言化できていないことがわかった。プロジェクトの評価とプロジェクトメンバー個々の評価は別もののはず。そこを整理して聞きたかった

＜学校関係者＞

・ 具体的で経過が良くわかり、参考になった
・ 大学ごとにプロジェクト型授業を模索していることが良くわかったが、評価についての説

明は時間不足、消化不良の感あり

＜学生＞

・ 自分の知っている PBL 評価およびプロジェクト科目の実施方法を知ることができた
・ 専修大学の、学生・教員の双方が企画書を出せることがユニーク
・ 学外の PBL も評価基準に関して悩んでいることを知った。また、他大学はプロジェクトの位置づけを必修に近い形で科目化しているということがわかった

＜企業関係者＞

・ 限られた時間ではあったが、定性的な内容は理解できた。具体的エピソードと定量的な話を聞かせていただきたかった
・ 専修大学の、学生と教員が相互にテーマを出し合うシステムに興味を持った
・ 様々な目的のプロジェクト科目を用意されていると、評価軸も色々異なってくることをイメージした。アウトプットを評価しない部分は少し驚いた
・ 時間を評価軸としてとらえる考え方が非常に面白いと思った

＜その他＞

・ 評価の全体像概略がわかった

2.内容についてのご意見やご感想

＜教員＞

・ 評価の仕方、従来型の授業形態に捉われない授業体制など参考になった
・ 50 分授業など、学部の特色にも大変関心を持った
・ もう少し具体的な内容を提示してほしかったと思う
・ 年次縦断プロジェクトは、これからの教育方法として有望であると思う
・ 専修大学ネットワーク情報学部の PBL の評価の視点は参考になった
・ 発表 15 分は短い。20～30 分とってほしかった
・ 継続なさっていることが素晴らしい。スライドのレジュメがあれば良かった
・ JABEE（日本技術者教育認定機構）の認定・審査における評価エビデンスなどを参考にすると大きなヒントになると考える（目標や達成度、評価など様々な尺度が示されている）
・ 両先生とも与えられた時間が少ないようだった。もう少し（30 分程度）の内容が良かったように思う

＜職員＞

・ 本音の部分を聞かせていただき、ほっとするやら、暗い気持ちになるやら、だった
・ 東京電機大学の基礎プロジェクトを 2 年次から 3 年次配当に変更した理由をもう少し詳しく伺いたかった
・ プロジェクト科目だけでなく、他科目との連携を意識されたプログラム作りの話が刺激的だった

＜学校関係者＞

・ 専修大学ネットワーク情報学部の実践例を知りたかった
・ 大学全体に取組みが見えて、スゴイと思った

＜学生＞

・ ゼミとプロジェクトの違いは何なのか。同志社大学では、よくサークルとプロジェクトの違いを教授からも指摘されていたが、他大学ではどう考えていらっしゃるのか伺いたかった
・ 専修大学の、評価についての明確な基準がないことが、少し物足りなかった

＜企業関係者＞

・ 必修化すべき（全ての学生に PBL の学びを体験してほしい）と願う立場としては、専修大学の評価の内容を細かく聞きたい（やる気がない子どもいると思うので）
・ 必修科目としての大変さがあるのではないか（全体の質、参加意欲を継続させるのが大変では？）

■パネルディスカッション

1.「誰が何をいかに評価するのか？」は、参考になりましたか？

＜教員＞
- 学生が発言したのが大変良かった
- 学生の発言が、本当に良い視点になった。こんなにたくさんの人の前で自分の意見を言うのは大変だったと思うがシンポジウムに必要なメンバーだったと思う
- もう少し、パネラー同士の意見交換が聞けると尚良かった
- 学生 2 人が入っていて大変良かった。教員だけの話し合いは片手落ちですね
- 学生からの問題提起が良い。評価の難しさを再認識できた
- 学生の意見が聞けた。学生の考えが面白かった。各パネラーの考えがクリア
- 山田先生の素晴らしいリードで、本音ベースで色々なことが聞けた
- 定量的評価は困難であることがわかった
- PBL の評価のみならず、大学教育の評価に関しても大変参考になった
- 後半の学生達の発言で、プロジェクト科目のプロセスが少し伝わってきたことと、この場自体が学生にとっては大きな学習機会になっていることが明確だった
- 実質的な議論が展開されていた
- 様々な発言、議論の中から今後の示唆がしっかりできている
- 司会者の独演会のようで、パネルディスカッションにはなっていない。司会者の言いたいことのためにゲストを並べているようだ
- 学生達の考え方、コメントが本質を突いており教員として大いに参考になった
- 最初の学生の評価に対する意見が非常に良かった。議論が深まったと思う
- PD にありがちだが、まとまりのないまま終わってしまった気がする。司会の発言量が多すぎ（面白くて良いのだが）。パネリストにもっと振ってほしかった、願わくば会場も巻き込んでほしかった

＜職員＞
- 教員、学生からの赤裸々な意見が聞けた
- 評価基準作りとその実践や難しさ、専門性と学び方の修得をどう評価するのか、考えていくことの必要性を考えることができた
- 学生がパネルディスカッションに参加する意味をきちんと学生自身に把握させておくことが大事（意見をかみ合わせる為に）

＜学生＞
- 西川さんの「何の為に評価するのか」は本当に驚きと開眼の一言だった。確かに受講生としてなぜだろうと漠然と疑問を抱いていたところだったので少しスッキリした
- 教育の評価は、評価する立場（教員）と評価される立場（学生）の違いによってその必要目的の理解は異なるのだと思った
- 「学生も評価する力が必要である」ということに、なるほどと思った
- 評価する側とされる側の議論が交わされて面白かったし、とても参考になった

＜企業関係者＞
- 教員側と学生側の意識のずれを理解できた。溝上先生の的確なコメントに賛同する
- 学生のコメントが現実的な内容として考えられた。評価者も走りながらでないと評価できないという点、同じくらい学生と本気で向かい合わないと表面的には何も見えない、という理解だが、企業側としてもその点は考えさせられた。学生の意見は新鮮だった
- 山田先生の「学生は評価されるだけでなく、評価する主体でもある」という言葉が印象に強く残った。最後の学生の言葉が秀逸だった
- 最初に目標、評価の観点を明示することの重要さを改めて感じた
- 「評価は何の為にするのか」という根本的な問いにとても考えさせられた

＜地方公共団体関係者＞
- 山田教授の進行が大変良かった

＜その他＞
- 評価の難しさが大変良くわかった
- 何のための評価か、基本的な問いを一緒に内省できた

2.内容についてのご意見やご感想

＜教員＞

- PBL や AL は学生にとって、それに取り組むとなんとなくやった気になるし成長した気になる、危険な薬みたいなもので、確かに一部効用は見られるが、きちんと見立て、処方する教員としての取組みが重要だと感じた。一方で最低限のベース能力がある学生には自由に活動させるということが、これまで身につかなかった能力を身につける（ジェネリックスキル）ブレイクスルーになるのかもしれないと感じた。ただそれは結果論ではなく、教員が設定したものでなければならない
- 司会の先生の進め方はよいと思うが、少しお話しすぎでは。パネラーやフロアの話をもっと時間をかけて引き出していただけるとよいと思う
- 山田先生の最後のコメントがこのディスカッションのテーマだったと思う
- 同志社の学生が素晴らしい。プロジェクト科目の成果なのか元々レベルや意識が高いのか、両方か
- 民間企業での業務評価手法を参考にする必要があり、又これは大変有効と考える
- 学生が評価について批判的なコメントを説得力のある言葉でできるようになっているのに感心した。これらはプロジェクト科目の成果かもしれない
- 学生が率直に自分の意見を堂々と話せていたのがまさに成果だと思う。素晴らしい内容だった
- 山田先生は「司会」というよりご自身の主張を伝えるため、うまくパネルディスカッションを利用された感じ。これ自体が同志社の底力なのだと感銘を受けた。本学でももっとこのようにハイレベルな意見交流の場を創りたい
- 内容は参考になったが劇場型パネルディスカッションになっていてフロア側からの意見を交えてほしかったと思う
- 材料が講師も含めて多すぎて、深まらない。学生達の意見が素晴らしい
- 事前打合せはした方が良い。ある程度の流れを参加者全員で共有しておかないと、公開討論の意味がなくなる。学生をパネリストに加えるならなおさらのこと。内容自体は非常に良かったが、進め方に問題ありと感じた

＜職員＞

- 「評価とは次のステップに進む足場作り」という言葉にはハッとさせられた。単位の認定というだけでなく、次に進む何かを提供しないといけないのだと思った
- 学生と腹を割って話すことが大切ということを実践したい。何を評価して欲しいのか、確認できれば指標の良いヒントになるように思った

＜学校関係者＞

- 学生自身が回答を求めすぎている？小中高の教育の受身体質問題が表面化しているのは残念。自己探求心や自律が問題ではないかと思うので、もっと解答がない難しいことなどを考え、悩むことが学生にとって必要ではないか。このような授業は PBL チーム学習は教えすぎないことも大切ではないか。山田先生の話が筋と感じる（＝腹を割って話し合うこと！）
- 「学生の主体的学び」をもっと推進しよう！
- 誰が何をいかに評価するのか？プロジェクト科目を設定する意義、学生が的確に鋭く見抜いていることに感心した。大学教育に留まらず、日本教育の在り方に対する根本的な問いかけだと思う

＜学生＞

- 社会人としての教員は成果を求めたがるのが当然であると思う。学生はその結果について「責任」がないと言えるのではないか。「目的・目標」を持たないプロジェクトは有り得ない
- 私も田中さんと同じように、やはり良い結果には必ず良いプロセスがついてくると思う。その中で時間×人数と結果の対比が評価になればいいなと思っていた（例えば、3 人で 100 人集めるイベントと 10 人で 100 人集めるイベントのプロジェクトのプロセスの差も見えてくると思う）

＜企業関係者＞

- プロセス評価の為の個人ポートフォリオ、チームポートフォリオは次年度プロジェクト科目でチャレンジしてみたい。会場との質疑応答があれば、もっと嬉しかった
- 学生が自分で評価することの重要性について、初めて考えることができた

＜その他＞
・　学生の体験的発言が重要な意味を持っていた

■その他、ご意見やご感想
＜教員＞
・　勉強になった。今後も PBL の方法論に関するシンポジウム等を実施してほしい
・　今回も山田先生の見事な差配に感動した。学生をこういう場でこういうふうに引っ張っていける能力が私にも欲しいと羨ましく思った。学生司会が立派だった
・　山田先生のお話はいつもとても参考になる。今後も数多く企画をお願いします
・　同志社大学、東京電機大学、専修大学の各該当担当者の取組みやプログラム、あるいは特にプロジェクトを体験した学生の声をインターネットに掲載し、他大学の関係者に PBL の必要性や重要性を示唆して欲しいと思う
・　基調を基調として進められなかったところがあり、少し残念だった
・　同志社大学の取組みは素晴らしい
・　PBL 科目だけを特別扱いするのではなく、従来のゼミ活動、サークル、ボランティア、アルバイト等学生生活全般において、もっと学生が主体的に「問い」を持つことを尊重するような関わりを進めることが重要だと思う
・　いつも重要な点をまっすぐに率直に切り込まれる、とても参考になる試み
・　学生だったので仕方ない点もあるが、司会が一本調子のうえ出演者の方と目線を合わせることなく紹介されていて、少し冷たい印象を受けた
・　教育界（大学界）だけでなく、PBL 評価は外部評価されるべき。評価には「自己評価」（当事者評価、自己満足）と「第三者評価」（外部評価、他者感動）の双方が必要だと思う
・　学習時間は、JABEE では、卒研では出勤簿的なものを用いてカウントしている。（同志社大学での MAX300ｈは、JABEE では不合格となる）
・　大変勉強になり、刺激を受けた。もっと学生に話をさせる場にしてほしい
・　本学でも PBL に取組みたいと考えているが､環境､学内の意識等で非常に難しいのが実情。しかし、参考に聞かせていただいて出来る事から取組んでいければと思う
・　パネルディスカッションで学生がメモを取りながら議論に加わっているのが印象的だった。「生きていく力」が高まっていると感じた
・　改めて「評価」を中心にカリキュラム全体を眺めていく取組みを続けていきたいと感じた
・　プロジェクトの共通項として「スケジュール管理」や計画の重要性があったと思うが、それを教育目標としたときにどう評価するのか、どう教育に取組むのかを聞きたいと思った
・　評価の問題を取り上げていただいたことは大変良かったし、また、学生に発表の機会が与えられている点もよいと思うが各発表に対して短い時間でもフロアからの質問を受けていただけるとありがたい
・　同様な評価について検討しているので、他校の事例は大変参考になった
＜職員＞
・　今日発表した学生の皆さんには 5 年後にもう 1 度フィードバックをしてみてほしい
・　パネルディスカッションで学生が言っていた「評価は次のステップに行く為の足場づくり」という言葉が印象的だった。認識の内容そのものではなく「評価とは何か？」という問いを立て、それに自分で答えを出したこと、また、そういう答えを出せるようになったことが成果なのかな、と思う
・　「評価＝次のステップへの足場」と考えられるようになったことが、学生の「打たれ強さ」に繋がったのだと思う。非常に刺激的なシンポジウムだった。ありがとうございました
・　いろいろ難しいところもあったのだと思うが、学生の報告を呼応するかたちで担当の先生のお話も聞いてみたかった
・　山田先生のわかりやすいコメントのおかげで、いつも持ち帰られるヒントや材料が、このシンポジウムにはある。毎回考えさせられる。ありがとうございます
＜学校関係者＞
・　全体的に時間的に良くまとまったシンポジウム「学びの原点」と感じた
＜学生＞
・　最後に聴衆からのコメント、もしくは質疑応答の時間があると嬉しかった
・　ただ学生は、担当者の思いを「善意」に解して、良い意味で「放任」されているのだと理

解している点には驚いた
現代の学生たちは一般的に「過保護」な時代に慣れているのではないか。その意味で自ら考え、自ら力をつけることに気付かせるということで、この教育は必要であると思う。本物の評価は社会に出てから受けることであると思う。ただそれが正当かどうかは別である

- 山田先生へ　私は PBL でたくさんのことを学びました。これからもっと素晴らしい学びの場を創造して下さることを祈り、応援しています

＜企業関係者＞

- 大変勉強になった。こちらもインプットしたものを整理するのに時間が少しかかりそうだ
- 学びの質をいかに確保するか、を探るにはプロジェクト型でできることが多くあると思ったので、是非様々な面でチャレンジしたいと思う
- またこのような機会があれば、ぜひ参加させて欲しい
- 一般的に「頑張った」という達成感で成功してしまうプロジェクト科目について、目標とそれに対する達成度を測定しないと大学の授業として行なう意味がない、という溝上先生の意見にとっても刺激を受けた
- 非常に楽しく、興味深いシンポジウムだった。PBL の今後の益々の発展を期待する

＜その他＞

- 最後のまとめに尽きている。ありがとうございました
- ダイナミックな動的評価、今後に期待している（一緒に考えていきたいと思う）

第3弾

文部科学省 大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム
同志社大学 PBL推進支援センター 2011年度シンポジウム

学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦！

―誰が何をいかに評価するのか？―

2012年2月18日(土)
13:00～16:40

同志社大学 今出川校地
明徳館1番教室

京都市上京区今出川通烏丸東入
京都市営地下鉄烏丸線今出川駅下車

入場無料
先着150名

挨拶
土田 道夫（同志社大学副学長 教育支援機構長・法学部 教授）
山田 和人（同志社大学PBL推進支援センター長 文学部 教授）

基調講演
「教育とは何かの基本に戻ってPBLの評価を考える」
溝上 慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授）

発表
同志社大学プロジェクト科目
学生報告1
学生報告2

報告
「東京電機大学情報環境学部における PBL型授業の評価について」
土肥 紳一（東京電機大学情報環境学部 准教授）

「専修大学ネットワーク情報学部における PBL型授業の評価について」
飯田 周作（専修大学ネットワーク情報学部 教授）

パネルディスカッション
「誰が何をいかに評価するのか？」
溝上 慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授）
土肥 紳一（東京電機大学情報環境学部 准教授）
飯田 周作（専修大学ネットワーク情報学部 教授）
同志社大学プロジェクト科目　　学生

【司会】同志社大学PBL推進支援センター長・文学部教授　山田 和人

申込 メールまたはFAXにて先着150名受付 詳細は裏面　**締切** 2012年2月13日(月)

主催 同志社大学 PBL推進支援センター（京都市上京区今出川通烏丸東入 京都市営地下鉄烏丸線今出川駅下車）

同志社大学

問合先：教育支援機構教務部教務課 TEL.075-251-4630 FAX.075-251-3064 e-mail.ji-pbl@mail.doshisha.ac.jp
http://www.doshisha.ac.jp/academics/activity/sympo120218.php
http://www.doshisha.ac.jp/students/curriculum/pbl/
http://www.doshisha.ac.jp/academics/institute/ppsc/

同志社大学

文部科学省 大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム
同志社大学 PBL推進支援センター 2011年度シンポジウム

締切
2012年2月13日(月)
先着150名

1. 件名「PBLシンポジウム参加申込」 2. 氏名・所属(勤務先・役職など)
3. 連絡先(住所・電話番号・e-mail)
4. 懇親会参加有無 を明記のうえ、下記までお申し込みください。

FAX. 075-251-3064 e-mail. ji-pbl@mail.doshisha.ac.jp

プログラム

挨拶

13：00～13：10 土田 道夫 (同志社大学副学長 教育支援機構長・法学部 教授)
13：10～13：20 山田 和人 (同志社大学 PBL 推進支援センター長・文学部 教授)

基調講演

13：20～14：00 「教育とは何かの基本に戻って PBL の評価を考える」
溝上 慎一 (京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授)

発表

同志社大学プロジェクト科目
14：00～14：15 学生報告 1
14：15～14：30 学生報告 2

14：30～14：45 休憩

報告

14：45～15：00 「東京電機大学情報環境学部における PBL 型授業の評価について」
土肥 紳一 (東京電機大学情報環境学部 准教授)
15：00～15：15 「専修大学ネットワーク情報学部における PBL 型授業の評価について」
飯田 周作 (専修大学ネットワーク情報学部 教授)

パネルディスカッション

15：15～16：40 「誰が何をいかに評価するのか？」
溝上 慎一 (京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授)
土肥 紳一 (東京電機大学情報環境学部 准教授)
飯田 周作 (専修大学ネットワーク情報学部 教授)
同志社大学プロジェクト科目 学生

(司会)同志社大学PBL推進支援センター長・文学部 教授 山田 和人

参加申込書

文部科学省 大学教育・学生支援推進事業【テーマA】 大学教育推進プログラム
第3弾 学びの原点 プロジェクト型教育の挑戦!
— 誰が何をいかに評価するのか? —

ふりがな				
氏 名				
勤務先			所属・役職	
連絡先	住所			
	TEL		FAX	
	e-mail			
懇親会	参 加 ・ 不参加		※参加費：3,000円・当日シンポジウム受付で申し受けます	

※お申し込みの際の個人情報は、申し込み後のお問い合わせや連絡のために使用します。また、本センターが主催する教育・研究活動についてのご案内などを送付させていただく場合があります。利用目的以外の使用、第三者への提供はいたしません。本学個人情報保護方針(右記、ホームページアドレス参照)に従い、適正に管理します。 http://www.doshisha.ac.jp/privacy/

同志社大学 PBL推進支援センター

今出川キャンパス 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 今出川校地弘風館1階 教務課内
TEL:075-251-4630 FAX:075-251-3064 E-mail:ji-pbl@mail.doshisha.ac.jp

ホームページもご覧ください http://www.doshisha.ac.jp/academics/institute/ppsc/